

令和6年度 学生の意識調査
報告書

令和7年3月

国立大学法人弘前大学

はじめに

青森県では18歳、20歳、22歳で大幅な転出超過が続き、若者の県外流出が深刻さを増しています。このため、県内大学等に在籍する学生の地元定着を図ることは喫緊の課題となっています。

この課題に取り組むため、昨年7月に県内大学等、産業団体、青森労働局及び青森県等で構成される「あおもり人材育成・県内定着促進協議会」が設立されました。

本調査は、本学が県内大学等15校（青森公立大学、青森県立保健大学、柴田学園大学、弘前学院大学、八戸工業大学、八戸学院大学、青森大学、青森中央学院大学、弘前医療福祉大学、弘前医療福祉大学短期大学部、柴田学園大学短期大学部、青森明の星短期大学、青森中央短期大学、八戸学院大学短期大学部、八戸工業高等専門学校）のご協力の下、各校に在籍する学生を対象に就職地選択に関する意識等についてアンケートを行い、その結果を集計・分析し取りまとめたものです。

この調査結果が、県内大卒者等の県内定着に向けた取組を進める本協議会構成員の皆様をはじめ、同様の取組を行う関係の皆様に基づ礎資料としてご活用いただくなど、活動の一助となることを願っています。

最後に、本調査の実施に当たり多大なご協力をいただきました県内大学等の皆様、アンケートにご回答いただいた学生の皆様、そして、調査に際し貴重なご意見ご助言を賜りました青森県及び県内経済団体の皆様には心から感謝申し上げます。

令和7年3月

国立大学法人弘前大学地域創生本部

目 次

第 1 章	調査の概要	1
1	調査の目的	1
2	調査方法	1
3	調査結果の概要	2
4	本報告書の概要	4
第 2 章	県内出身者の希望初職地選択行動	6
1	はじめに	6
2	個人属性別希望初職地	6
3	家族環境と希望初職地	8
4	課外活動と希望初職地	9
5	地域志向教育と希望初職地	10
6	希望産業と希望初職地	11
7	就職活動の情報源と希望初職地	15
8	小括	16
第 3 章	県外出身者の希望初職地選択行動	18
1	はじめに	18
2	個人属性別希望初職地	18
3	家族環境と希望初職地	20
4	課外活動と希望初職地	21
5	地域志向教育と希望初職地	23
6	希望産業と希望初職地	24
7	就職活動の情報源と希望初職地	27
8	小括	27
第 4 章	初職地選択行動の決定要因	29
1	はじめに	29
2	構造モデル	29
3	基本統計量	31
4	推計結果	33

5 階層的分析	36
6 小括	37
第5章 主成分分析を用いた県内出身学生の就業地選択理由分析	39
1 本章の概要	39
2 分析手法	39
3 分析結果	40
3-1 県内企業に対するイメージ	40
3-2 就職先を選ぶ際に重視する要素	44
3-3 県内企業就職希望者の重視条件	48
3-4 県外就職希望者の重視要件	53
4 まとめ	57
参考資料	59
回答者の集計表	65

第1章 調査の概要

李 永 俊

1. 調査の目的

本調査は、県内大卒者の県内定着の促進に向けた取組を推進するための基礎資料として利用することを目的とする。若者の地域間移動に関する多くの先行研究では、地域間の賃金格差、雇用機会の格差、アメニティ（文化施設、遊び場、教育施設など）の差、そして未知の生活への憧れなどが移動の主な理由として挙げられている。ただし、昨今の全国的な人手不足により、雇用機会の格差および賃金格差は大幅に縮小している。また、IT技術の発展に伴うネットショッピングや仮想空間の利活用が高まり、利便性の格差も一定程度縮小している。にもかかわらず、大卒者の県外就職は歯止めがかからない状況が続いている。そこで、今までは注目していなかった個人を取り巻く社会経済環境や地元に対する意識などに注目し、流出の背景と理由を明らかにする。

本調査の目的は、移動の背景と理由を明らかにし、定着促進に向けた取組を推進することにある。そのため、下記の具体的な理由で質問紙を設計した。①本県大学生を取り巻く社会経済環境の影響を明らかにする。質問項目としては、個人属性、家族環境、社会関係資本を追加した。②地元に対する意識については、どのような教育や経験で地元意識が形成されているかについては、まだ十分な研究蓄積がなされていない。そこで、本調査では小中高で行っている地域志向教育や体験プログラム、そして大学での地域志向教育や体験型学習プログラム、課外活動やアルバイトなどの経験に関する質問を通して、地元に対する意識の形成経路の分析を試みる。また、地元に対する意識が地元定着に与える影響を、外生条件、つまり賃金や就業機会、アメニティの格差などをコントロールした上で、明らかにすることで、各教育、体験プログラムの効果を二段階で評価したい。ここでは、調査概要を紹介したい。

2. 調査方法

調査方法の概要は以下のとおりである。

・調査対象

調査対象は、青森県内の高等専門学校、短期大学を含む16校に在学中の学生を対象とした。ただし、弘前大学医学部医学科は除き、八戸工業高等専門学校は4、5年生のみを対象とした。

- ・抽出方法

サンプルの抽出は行わず、全数調査を実施した。

- ・調査法

Forms を利用したインターネット調査

- ・調査期間

2024年6月1日～8月31日

3. 調査結果の概要

- ・回収状況

回答数は4,935で、有効回答率は4,935/13,957で35.4%だった。

- ・回答者のプロフィール

表1 回答者の性別構成比

	度数(人数)	構成比(%)
男性	2088	42.3
女性	2826	57.3
不明	21	0.4
合計	4935	100.0

表2 回答者の所属学部

	度数(人数)	構成比(%)
文系	965	19.6
教育学系	794	16.1
理系	1635	33.1
保健学系	1499	30.4
薬学系	42	0.9
合計	4935	100.0

表 3 回答者の学年

	度数(人数)	構成比(%)
1年生	1816	36.8
2年生	1326	26.9
3年生	925	18.7
4年生	868	17.6
合計	4935	100.0

表 4 回答者の出身地

	度数(人数)	構成比(%)
北海道	653	13.2
青森県	3090	62.6
岩手県	332	6.7
秋田県	268	5.4
宮城県	126	2.6
山形県	48	1.0
福島県	34	0.7
関東・甲信越	212	4.3
東海・北陸	76	1.5
近畿	33	0.7
中国・四国	14	0.3
九州・沖縄	14	0.3
外国	35	0.7
合計	4935	100.0

表 5 回答者の希望初職地

	度数(人数)	構成比(%)
北海道	628	12.7
青森県	1940	39.3
岩手県	223	4.5
秋田県	156	3.2
宮城県	489	9.9
山形県	37	0.8
福島県	27	0.6
関東・甲信越	1205	24.4
東海・北陸	90	1.8
近畿	63	1.3
中国・四国	13	0.3
九州・沖縄	23	0.5
外国	41	0.8
合計	4935	100.0

4. 本報告書の概要

調査結果は、いくつかの視点から分析を行った。おおよそ、それぞれの視点で各章が構成されている。

第2章では、県内出身者を対象に、個人属性、家族環境、大学生活、希望労働条件に基づく希望初職地の選択行動を分析した。その結果、女性や母親が県内出身である若者は県内希望が高い一方、理系学生や課外活動に積極的な若者は県外移動に対する心理的コストが低いことが明らかになった。また、希望職種や初任給水準、情報源の違いが選択行動に影響していることが示唆された。

県外希望者には好奇心や都市部の利便性、良い労働条件への期待があり、これに応える支援が必要である。一方、地元志向の若者には安心感を提供することが効果的である。地域企業と若者のマッチングを強化し、地元定着を促進するための情報発信や支援体制の構築が求められる。

第3章では、県外出身者を対象に、個人属性、家族環境、大学生活、希望労働条件に注目し、希望初職地の選択行動を分析した。分析の結果、青森県より経済状況が良いと思わ

れる北海道、宮城県、関東・甲信越の出身者にUターン希望者が多いことが判明した。また、家族環境では、母親が定住者である場合にUターンタイプが多いことが確認された。さらに、産業別では、生活関連サービス業・娯楽業にIターンタイプが多く、公務、医療・福祉関連産業に青森定着タイプが多い傾向が見られた。

以上の結果から、県外出身者が学卒後に青森県内に定着する可能性は低いと言わざるを得ない。しかし、全体の約5.0%前後ではあるものの、学卒後に県内を選択しようとしている学生が一定数いること、さらに「希望する企業があるから」といった理由を挙げていることから、県外出身者に対して県内企業の情報を的確に届けることが有効であると考えられる。せっかく青森県を選んで来てくれた若者たちが、学卒後にも自ら喜んで選び続けてくれるような環境整備が急務である。

第4章では、個人の取り巻く社会経済環境や教育課程における様々な経験から形成される地元に対する意識に注目し、初職地選択行動の決定要因を、構造モデルを用いて分析した。分析の結果、家族環境では母親が、経験では地域イベントや祭りなどの経験が、社会関係資本では友人・知人や近隣住民との良好な関係が地域への愛着を高め、地域の愛着の高さが労働市場条件をコントロールしても地元就職を後押ししていることが明らかになった。また、若者がおかれている経済状況では、経済的にゆとりがない層は「困難」と経済的な困難さを補う金銭的な条件が重要で、経済的にゆとりがある層では「愛着」と雇用機会が重要な要因となっていることが示された。

第4章の分析結果から、若者の地元定着のためには、心理的な側面と経済的な側面を総合的に捉えたアプローチが必要であることが示された。心理的要因としては、地元愛着を高めるための施策、具体的には祭りや地域イベントなどに主体的に参加できるような環境づくりなどが、長期的には若者の地域定着を促進する可能性がある。他方、経済的環境の整備としては初任給の向上や、地域内で安定した雇用を提供する環境整備が重要で、特に地域密着型の職業におけるサポートが鍵となりうる。

第5章では、青森県出身学生の企業イメージおよび就職先選択理由に注目し、主成分分析を用いて県内就職希望者と県外就職希望者の評価軸の違いやその背景を明らかにした。分析の結果、県内就職希望者は「地域密着性」や「家族支援」を重視し、地域への愛着が強いことが示された。一方、県外就職希望者は「経済的条件」や「福利厚生」を優先する傾向が確認された。また、ライフステージが就業地選択理由に与える影響も大きく、結婚や子育てを想定している場合は家族や地域とのつながりを重視し、転職や定年退職を想定している場合は柔軟な価値観を持つ傾向が見られた。

第5章の分析結果から、県内就職希望者を増やすためには、地域密着型の雇用環境を整備するとともに、経済的条件の改善や福利厚生の充実を図る施策が重要であることが示唆された。特に、地元企業の魅力を発信し、若者が地域に定着するための多面的なアプローチが必要である。

第2章 県内出身者の希望初職地選択行動

李 永 俊

1. はじめに

本章では、青森県内出身者、3,090名を対象を絞り、希望初職地選択行動を概観する。李・花田（2023）では、出身地によって希望初職地が大きく異なっていることを明らかにしている。今回の調査でも、青森県内出身者は希望初職地として59.8%が県内を、40.2%が県外を希望しているのに対し、県外出身者の場合は県内希望者が5.0%、県外希望者が95.0%となっており、出身地によって希望初職地が大きく異なることが明らかになった。そのため、より正確な分析を行うためには、出身地別に分けて分析を行うことが求められる。そこで、まず本章では青森県内出身者に分析対象を絞り、初職地選択行動を明らかにする。

2. 個人属性別希望初職地

表1 性別希望初職地

属性	希望初職地		カイ二乗 合計 検定結果 (括弧内人数)
	県内	県外	
性別			
男性	56.8	43.2	100.0(1,171)
女性	61.7	38.3	100.0(1,907)

注) ***印は、1%水準で有意であることを示す。性別無回答者12名を取り除いている。

ここでは、個人属性別に希望初職地の傾向を分析する。表1は、性別ごとに希望初職地を整理したものである。地域間の移動には、引っ越し費用などの経済的コストに加え、家族から離れ新しい環境に適応しなければならないことによる不安といった心理的コストが伴う。そのため、一般的には男性よりも女性の方が、心理的コストが高く、移動に対して消極的であるとされている。表1を見ると、男性の県外希望者は43.2%であるのに対し、女性は38.3%と、男性が約5ポイント上回っている。総務省の人口移動統計の20～24歳層の転出者数を見れば、依然として男性の割合が若干高いものの、近年20～24歳層の女性の移動人口は増加傾向にある。この背景には、女性の大卒者数の増加と、県内における大卒女性の労働需要の不足が影響していると考えられる。

表 2 大学生生活と希望初職地

大学生生活	希望初職地		カイ二乗 検定結果	合計 (括弧内人数)
	県内	県外		
学系統	文系	62.6	37.4	100.0(668)
	教育学系	69.7	30.3	100.0(594)
	理系	44.0	56.0	*** 100.0(814)
	保健学系	64.1	36.0	100.0(982)
	薬学系	87.5	12.5	100.0(32)
学年	1年生	62.8	37.2	100.0(1,169)
	2年生	60.0	40.0	** 100.0(855)
	3年生	55.7	44.3	100.0(573)
	4年生	57.0	43.0	100.0(493)

注) **、**印は、1%、5%水準で有意であることを示す。

次に、大学の専門分野と学年別に希望初職地を整理したものが表 2 である。学系については各大学のカリキュラムを精査し、5つの学系に分類した。文系と理系は伝統的な学問領域であり、教育学系、保健学系、薬学系は資格を伴う学問分野で、県内就職を希望する割合が高い傾向にある。表からは、県内希望者の割合が高い順に薬学系、教育学系、保健学系、文系、理系となっている。

特に理系では、県内希望者が 44.0%にとどまり、他の学問分野と比較して約 20 ポイントも低い。このことは、県内における理系大卒者の希望に沿う雇用機会が不十分であること、あるいは労働条件や職種とのミスマッチが多いことを示していると考えられる。また、理系では大学院進学希望者が多いが、彼らを受け入れるための十分な受け皿が県内にないことも一因として考えられる。

次に学年別に見ると、県内希望者の割合が最も高いのは 1 年生で 62.8%、次いで 2 年生が 60.0%、4 年生が 57.0%、最も低いのは 3 年生で 55.7%となっている。1 年生と比べると、3 年生は 7.1 ポイントも低下している。大学 3 年生は就職活動が本格化する時期であり、求人票の労働条件や企業について調査を行うほか、近年ではインターンシップやトライアル雇用などを通じて実際に職場を体験する機会も増えている。そのような時期に県内希望が大きく減少していることは、非常に重要な意味を持つと考えられる。

この減少の背景には、都市部の企業と比較して雇用条件の差を実感し希望先を変更した可能性や、自身のライフプランや家族の意向が変化し希望初職地を再考した可能性が考えられる。このような変化の要因については、追跡調査を通じてより詳細に分析する必要がある。

3. 家族環境と希望初職地

ここでは、若者を取り巻く家族環境が初職地選択行動にどのような影響を及ぼしているのかを概観する。少子化が進行する近年において、家族の存在は初職地を選択するうえで重要な決定要因の一つとなっている。また、親にとっても、自身の老後のことを考え、子どもができるだけ実家の近くに暮らしてほしいと願う声が大きくなっているように感じられる。さらに、近年多発している自然災害や脅迫犯罪などの影響により、家族で一緒に暮らす、あるいは近くに住むことの必要性が高まっていると考えられる。また、子育て世代においては、育児と仕事を両立するうえで家族の支えが重要な役割を果たすことへの認識が再び強調されつつある。

表3 親の出身と希望初職地

親の出身	希望初職地		カイ二乗 検定結果	合計 (括弧内人数)
	県内	県外		
父親	県内	60.3	n.s.	100.0(1,738)
	県外	59.1		100.0(1,352)
母親	県内	61.5	**	100.0(1,534)
	県外	58.0		100.0(1,556)

注) **印は5%水準で有意であることを示す。

表3は、親の出身地を県内と県外に分けて希望初職地を整理したものである。カイ二乗検定の結果を見ると、父親については統計的に有意な差が見られなかった。一方で、母親については5%水準で有意差が認められた。具体的には、母親が県内出身の場合、県内希望者の割合は61.5%であるのに対し、母親が県外出身の場合は58.0%となり、母親が県内出身である場合に県内希望者が多いことが明らかになった。

これは、母親が老後への不安や、子ども世代の子育て期における役割などの観点から、暮らしにおいて重要な存在であると感じられることに起因していると考えられる。そのため、この結果は、母親への働きかけが若者の地元定着に重要な役割を果たす可能性を示唆している。

表 4 家族環境と希望初職地

家族環境		希望初職地		カイ二乗 検定結果	合計 (括弧内人数)
		県内	県外		
三世代	1	61.3	38.7	n.s.	100.0(1,056)
	0	59.0	41.0		100.0(2,034)
ひとり親	1	57.0	43.0	n.s.	100.0(572)
	0	60.4	39.6		100.0(2,518)
一人っ子	1	60.8	39.3	n.s.	100.0(693)
	0	59.5	40.5		100.0(2,397)
長子	1	59.2	40.8	n.s.	100.0(1,968)
	0	60.8	39.2		100.0(1,122)

注) 家族環境の1は特定のカテゴリに該当していることを表す。

次に表4は家族形態が三世代家庭であるか、ひとり親家庭であるか、一人っ子、長子であるかによって希望初職地がどのように異なっているのかを見たものである。日本には伝統的に、家系を継ぐ、あるいは先祖代々の墓を守るなどの家族文化があり、長子あるいは一人っ子の場合には地元に残る意識が強いことが予想されたが、今回調査では統計的に有意な差が見られなかった。また、三世代家庭のように長い時間同じ地域で生活していると、地域文化への慣れや人間関係が豊富であるなど、地元に残るメリットが多い。しかし、今回の調査結果ではそのような傾向は見られなかった。

4. 課外活動と希望初職地

次に課外活動と希望初職地の関係を見てみたい。サークルやクラブ活動、アルバイトなどは若者が最も楽しみにしている大学生活の一部である。また、近年には多発する自然災害の影響もあり、さまざまなボランティア活動に励む学生も多くなっている。このような課外活動は、さまざまな人々との出会いの場であり、活動を通して地域社会を知る貴重な学びの機会でもある。そして、アルバイトはいうまでもなく、学費や生活費を補う貴重な収入源でもある。

このような活動を通しての社会関係資本(人間関係)の構築や経済活動は就職活動においても大きな影響を及ぼす。石黒(2007)によれば、社会関係資本が豊富な人は社会関係資本からのメリットを維持するために地元に残ろうとする。他方、社会関係資本が豊富な人は、対人不安などが少なく、新しい土地に移動しても新しい仲間を作ることが可能で、移動に伴う心理的コストが小さいと考えられる。

表 5 課外活動と希望初職地

課外活動		希望初職地		カイ二乗検 定結果	合計 (括弧内人数)
		県内	県外		
アルバイト	1	54.1	45.9	***	100.0(1,964)
	0	69.7	30.3		100.0(1,126)
クラブ&サークル	1	58.5	41.5	n.s.	100.0(1,473)
	0	60.9	39.1		100.0(1,617)
ボランティア	1	58.6	41.4	***	100.0(2,531)
	0	64.9	35.1		100.0(559)

注) ***印は、1%水準で有意であることを示す。課外活動の1は特定のカテゴリに該当していることを表す。

表 5 は、課外活動別に希望初職地を整理したものである。表からクラブやサークル活動には統計的に有意な差が見られなかった。他方、アルバイトの経験者で県外希望者が 45.9% であるのに対し、未経験者の県外希望者は 30.3% で 15.6 ポイントの差があることがわかる。また、ボランティア活動も経験者の県外希望者が 41.4% であるのに対し、未経験者は 35.1% で 6.3 ポイントの差が見られた。このことから、課外活動が対人不安を軽減させ、県外移動への心理的なコストを低くし、県外への就職を希望する若者が多くなる可能性を示唆している。

5. 地域志向教育と希望初職地

次に、近年各大学などで積極的に取り入れられている地域志向教育および地域の現場を体験する教育の教育効果について見てみよう。2013年に文部科学省が地域社会の課題解決に向けた教育プログラムの推進を目的の一つとした「地（知）の拠点整備事業」大学COC事業により、多くの大学が地域志向科目を新設した。各大学では、卒業に必要な単位として地域志向科目を一定数以上履修することを求めており、その必要単位数は大学によって異なっている。本研究では、各大学の基準が異なることを考慮し、3科目以上と未満に分けて分析を行った。また、地域の現場体験については、経験の有無で区別している。

表 6 地域志向教育と希望初職地

		希望初職地		カイ二乗 検定結果	合計 (括弧内人数)
		県内	県外		
地域志向教育	3科目未満	59.4	40.6	n.s.	100.0(2,370)
	3科目以上	61.0	39.0		100.0(720)
地域の現場体験	なし	55.1	44.9	***	100.0(1,246)
	あり	62.9	37.1		100.0(1,844)

注) ***印は、1%水準で有意であることを示す。

表 6 から、地域志向科目に関しては統計的に有意な差は見られなかった。ただし、この結果から地域志向教育の効果を判断するのは軽率である。なぜなら、先ほど述べたように、各大学のカリキュラム規定が異なるため、3科目以上という区切り方が有効であったかについて、分析方法に課題が残っているからである。

続いて、地域体験学習の有無について検討する。地域体験学習の経験がある場合、県内就職希望者の割合は 62.9%であるのに対し、未経験者は 55.1%であり、7.8 ポイントの差が見られた。また、カイ二乗検定の結果、1%水準で有意であることが確認され、地域体験学習の経験有無が地元就業希望に影響を及ぼしていることがわかる。ただし、地域の現場体験の有無については、資格系の学系において地域体験学習の機会が多い傾向が見られる。そのため、専門分野の違いが結果に影響している可能性を考慮する必要がある。

6. 希望産業と希望初職地

次に、希望産業別に希望初職地を整理した結果を表 7 に示す。初職地選択において最も重要な要因は、言うまでもなく希望する仕事や企業が存在するかどうかである。そのため、県内に十分な労働需要が見込まれる産業では県内で仕事を見つける確率が高く、逆に県内で学生が希望する職場環境や待遇に適合した労働需要が不十分な産業では、県内に留まることが難しくなる傾向がある。

表 7 希望産業と希望初職地

希望産業	希望初職地		合計	
	県内	県外	構成比	人数
公務	68.3***	31.7	100.0	875
農林漁業	64.0	36.0	100.0	175
建設業	39.2	60.8***	100.0	158
製造業	47.9	52.1***	100.0	217
電気・ガス・水道業	38.5	61.5***	100.0	135
情報通信業	41.8	58.2***	100.0	323
運輸・郵便業	39.2	60.8***	100.0	51
卸売・小売業	58.9	41.1	100.0	197
金融・保険業	52.6*	47.4	100.0	152
不動産・物品賃貸業	50.0	50.0	100.0	80
学術研究・専門・技術サービス業	45.3	54.7***	100.0	287
宿泊・飲食サービス業	54.1**	46.0	100.0	296
生活関連サービス・娯楽業	44.9	55.1***	100.0	245
教育・学習支援業	68.9***	31.1	100.0	669
医療・福祉	64.0***	36.0	100.0	1124
複合サービス業	48.5	51.5**	100.0	99
その他	42.7	57.3***	100.0	82

注) ***、**、*印は、カイ二乗検定で1%、5%、10%水準で有意であることを示す。

表 7 によると、県内に留まりやすい産業として統計的に有意な差が認められたのは、教育・学習支援業（68.9%）、公務（68.3%）、医療・福祉（64.0%）である。

一方、県外希望者が有意に多い産業としては、電気・ガス・水道業（61.5%）、建設業（60.8%）、運輸・郵便業（60.8%）、情報通信業（58.2%）が挙げられる。これらの産業はいずれも生活インフラや建設、情報通信といった理系分野に関連が深い職種であり、理系人材の県外流出の一因となっていることが示唆される。

このような傾向は希望する職種においても類似した結果が見られる。表 8 は、希望する職種別に希望初職地を整理したものである。県内希望者が有意に多い職種としては、事務的な仕事（62.9%）、管理的な仕事（58.1%）、サービスの仕事（55.8%）が挙げられる。一方で、県外希望者が多い職種としては、生産工程の仕事（53.4%）や建設・採掘の仕事（52.6%）が挙げられる。この結果から、文系分野に近い職種は県内に留まる傾向が強く、理系分野に近い職種は県外へ移動する傾向が明確に読み取れる。

表 8 希望職種と希望初職地

希望職種	希望初職地		合計	
	県内	県外	構成比	人数
管理的な仕事	58.1***	41.9	100.0	687
専門的・技術的な仕事	59.4	40.6	100.0	1954
事務的な仕事	62.9**	37.2	100.0	856
販売の仕事	54.4**	45.6	100.0	307
サービスの仕事	55.8***	44.2	100.0	776
保安の仕事	56.8	43.2	100.0	111
生産工程の仕事	46.6	53.4***	100.0	131
運輸・機械運搬の仕事	48.9	51.1	100.0	47
建設・採掘の仕事	47.4	52.6**	100.0	78
運搬・清掃・包装等の仕事	69.4*	30.6	100.0	72
その他	65.7	34.3	100.0	99

注) ***、**、*印は、カイ二乗検定で1%、5%、10%水準で有意であることを示す。

表 9 希望初職地別希望初任給水準

(単位：万円)

	平均	標準偏差	最小値	最大値
希望就職地 県内	22.4	5.1	10.5	50.0
希望就職地 県外	23.8	5.5	12.0	50.0

次に、希望初職地別に希望初任給の水準をまとめた結果を表 9 に示す。希望初任給の平均と標準偏差は、回答の中から 10 万円未満および 51 万円以上を除外して集計したものである。県内希望者の平均希望額は 22.4 万円、県外希望者の平均希望額は 23.8 万円であった。

令和 5 年の「賃金構造基本統計調査」によると、青森県の大卒者の初任給は 21.5 万円、東京都では 24.5 万円とされている。このデータと比較すると、県内希望者は実際の賃金水準より 9 千円高く予想しており、県外希望者は東京都の実際の賃金水準よりも 7 千円低く希望していることがわかる。

この結果から、県内希望者は就職活動中に求人票を確認する際、自分の希望額が実際の賃金水準に届かないことを認識し、現実とのギャップを感じる可能性が高い。一方で、県外希望者は、特に東京都などの求人を目にした場合、希望額を上回る賃金水準に対して喜びを感じる可能性が高いと考えられる。こうした賃金に対する期待と現実のズレが、就職活動が本

格化する大学 3 年生の段階で県内希望者が有意に減少する要因の一つとなっていると推測される。

表 10 希望初職地別希望理由

希望理由	(複数回答)	
	希望初職地	
	県内	県外
自分の能力が活かせそうだから	20.0	20.3
希望する企業があるから	14.0	37.7
知人が多いから	31.6	6.8
親や家族を支えたいから	51.2	5.2
出身地域が好きだから/ その地域が好きだから	48.1	22.1
就職後の生活が精神的に楽だと思うから	38.2	12.3
希望する給与や待遇が期待できるから	4.2	38.0
物価が安く、経済的な負担が少ないから/ 出身地域と別の場所で生活してみたいから	18.0	46.7
親と家族の勤めで	10.1	2.1
奨学金を借りているから	15.1	6.6
住み慣れていて便利だから/ 都会の方が便利だから	62.3	46.5
その他	1.8	2.7

以上の労働条件に関連して、希望する初職地を選んだ理由を整理したものが表 10 である。この表は、希望初職地で働きたい理由を複数回答形式で選択した結果を示している。

県内を希望する理由としては、「住み慣れていて便利だから」(62.3%)、「親や家族を支えたいから」(51.2%)、「出身地域が好きだから」(48.1%)が多い。これらはいずれも環境要素に分類され、労働市場の条件が含まれていない点が特徴的である。

一方、県外を希望する理由としては、「出身地域と別の場所で生活してみたいから」(46.7%)と「都会の方が便利だから」(46.5%)が上位を占める。これに続いて、「希望する給与や待遇が期待できるから」(38.0%)と「希望する企業があるから」(37.7%)が挙げられる。一般的に若者は都市部に好奇心や憧れを持つとされるが、実際には経済的な条件などを考慮して転出を選択している可能性もあることが明らかである。

さらに、「出身地域と別の場所で生活してみたいから」と回答した者の特徴を分析した。性別では、回答者 580 名のうち 67.2%に当たる 390 名が女性であった。学系別では、理系 183 名 (31.6%)、保健学系 171 名 (29.5%)、文系 136 名 (23.5%) の順となっていた。また、この回答を選んだ者が併せて最も多く選んだ理由は、「都会の方が便利だから」(51.4%)

であり、次いで「希望する給与や待遇が期待できるから」（42.8%）が挙げられる。これらの結果から、都市部への好奇心や憧れの背景には、経済的な合理性があることが示唆される。

7. 就職活動の情報源と希望初職地

ここでは、学生が就職活動に関する情報をどのように入手しているのかに注目してみたい。表 11 は入手方法を複数回答形式で回答した結果を整理したものである。表から希望初職地が県内・県外を問わず 7 割以上の学生がインターネットの求人情報を通して情報を入手していることがわかる。ネット時代の現状からすると当然の結果であると言える。続いて多いのは、県内では学校の就職支援センターなど（41.3%）、新聞・雑誌・企業のパンフレット（40.2%）となっている。他方、県外希望者ではインターネットの求人情報（77.7%）に続いて、新聞・雑誌・企業のパンフレット（41.5%）、学校の就職支援センターなど（34.0%）となっている。学校の就職支援センターなどの依存割合に差が見られることがわかる。

表 11 情報源と希望初職地

情報源	(複数回答)	
	希望初職地	
	県内	県外
新聞・雑誌・企業のパンフレット	40.2	41.5
インターネットの求人情報	71.0	77.7
ハローワーク、ジョブカフェなど	13.2	12.5
民間の職業紹介所	5.0	5.2
合同会社説明会のようなイベントで	19.6	24.9
学校の就職支援センターなど	41.3	34.0
両親の紹介	16.1	9.2
両親以外の家族、親戚の紹介	7.1	5.1
親しい友人の紹介	9.1	9.9
あまり親しくない知り合いの紹介	1.0	1.4
その他（以下にご記入ください）	1.5	1.2

表 12 情報源の交差項

情報源	希望初職地		カイ二乗 検定結果	合計 (括弧内人数)
	県内	県外		
インターネットの求人情報のみ	55.2	44.8		100.0(1,441)
インターネット+学校の就職支援センター	61.7	38.4	***	100.0(837)
学校の就職支援センターのみ	71.0	29.0		100.0(348)

注) ***印は1%水準で有意であることを示す。

そこで、表 12 では学生が最も多く利用しているインターネットの求人情報と学校の就職支援センターに注目し、両者の利用形態と希望初職地との関係を分析した。この表では、二つの情報源の利用形態を三つのタイプに分けてクロス集計を行った。

表によると、県内希望者が最も多いのは学校の就職支援センターのみを利用するタイプ(71.0%)であり、次いでインターネットの求人情報と学校の就職支援センターを併用するタイプ(61.7%)、最後にインターネットの求人情報のみを利用するタイプ(55.2%)となっている。

以上の結果から、学校の就職支援センターは若者の県内定着において重要な役割を果たしていることが示唆される。また、県内企業の担当者は、若者の多くがインターネットの求人情報サイトを利用している事実に基づき、インターネットを活用した情報発信をさらに強化すべきである。

8. 小括

この章では、県内出身者を対象に、個人属性、家族環境、大学生活、希望労働条件に注目し、希望初職地の選択行動を分析した。

分析の結果、以下のことが明らかになった。個人属性では、女性に県内希望が多いことが確認された。家族環境では、母親が県内出身であることが県内希望を高める要因となることが示唆された。大学生活においては、理系学生の県内希望が低いことや、アルバイトやボランティア活動に積極的な若者ほど、県外移動に対する心理的コストが低く、移動する傾向が高いことがわかった。

市場条件に関しては、教育・学習支援業、公務、医療・福祉を希望する者に県内希望者が多く、電気・ガス・水道業、建設業、運輸・郵便業、情報通信業を希望する者に県外希望者が多い傾向が確認された。また、県内希望者の希望初任給水準は現実の初任給より高い水準を希望し、県外希望者は現実の初任給より低い傾向が見られた。さらに、情報源として学校の就職支援センターを利用する若者に県内希望者が多いことも明らかになった。

以上の分析を通じて、県外希望者の選択行動には、好奇心や都市部の利便性、より良い労働条件への期待が影響しており、こうした若者のニーズに応える情報発信や支援が必要で

ある。一方で、地元志向が強い若者に対しては、心理的・環境的な安心感を提供することが有効であることがわかった。

これらの知見を踏まえ、具体的には、県内企業による労働条件の見直しや、若者の多様な価値観に対応した柔軟な支援体制の構築が求められる。さらに、学校の就職支援センターやインターネット求人情報を通じた効果的な情報発信により、地域企業と若者のマッチングを強化することが重要である。

【参考文献】

石黒格（2007）「青森県出身者の県外進学に関わる要因：県内外進学者の比較から」『人文社会論叢社会科学編』（18）、 pp.69-79。

第3章 県外出身者の希望初職地選択行動

李 永 俊

1. はじめに

本章では、青森県外出身者 1,845 名を対象に、希望初職地の選択行動を概観する。前述のとおり、出身地によって希望初職地には大きな違いがある。県外出身者は大学進学時に出身県を離れ、移動を経験しているため、初めて移動する者に比べて移動に伴う心理的コストが低いと考えられる。

奥田（2023）の研究では、大卒者の初職時の U ターン移動について、国立社会保障・人口問題研究所の「人口移動調査」の個票データを用いた分析が行われている。主な結果として、大学所在地と出身地域の所得および有効求人倍率を比較した際、出身地域が経済的に豊かであれば U ターン移動が行われる一方、大学所在地が豊かであれば U ターン移動が抑制されることが示されている。本調査では、青森県に進学した県外出身者についても、同様の傾向が見られるのかを検討する。

ここでは、移動パターンによって希望初職地を三つのタイプに分類した。卒業後に青森県内での就職を希望する場合を「青森定着タイプ」、出身県での就職を希望する場合を「U ターンタイプ」、青森県でも出身県でもない第三の地域での就職を希望する場合を「I ターンタイプ」とした。タイプ別の割合を見ると、青森定着タイプが 93 名（5.0%）、U ターンタイプが 1,262 名（68.4%）、I ターンタイプが 490 名（26.6%）となり、U ターンタイプが最も多い結果となった。これらのタイプ間でどのような違いがあるのかを明らかにしていく。

2. 個人属性別希望初職地

ここでは、個人属性別に希望初職地の傾向を分析する。表 1 は、性別および出身地別に希望初職地を整理したものである。まず、性別については統計的に有意な差は見られず、男女ともに希望初職地の割合はほぼ同じである。具体的には、U ターンタイプが約 70.0%、I ターンタイプが 25.0%強、青森定着タイプが約 5.0%であることがわかる。

次に、出身地別の傾向を見ると、青森県よりも経済状況が良好とされる地域、例えば北海道、宮城県、関東・甲信越では、U ターンタイプが最多となっている。具体的には、北海道出身者の 80.3%、宮城県出身者の 73.0%、関東・甲信越出身者の 79.7%が U ターンタイプに分類されている。この傾向は、奥田（2022）の結果と一致している。

また、北海道からの進学者が多い青森県にとっては、大学進学を契機とした転入が期待しづらい状況であることを示唆している。

表 1 性別出身地別希望初職地

属性		タイプ			カイ二乗 検定結果	合計 (括弧内人数)
		青森定着	Uターン	Iターン		
性別	男性	4.6	68.8	26.6	n.s.	100.0(917)
	女性	5.4	68.2	26.3		100.0(919)
出身地	北海道	1.2	80.3	18.5	***	100.0(653)
	岩手県	6.3	56.3	37.4		100.0(332)
	秋田県	9.7	53.7	36.6		100.0(268)
	宮城県	4.8	73.0	22.2		100.0(126)
	山形県	6.3	68.8	25.0		100.0(48)
	福島県	0.0	55.9	44.1		100.0(34)
	関東・甲信越	7.1	79.7	13.2		100.0(212)
	東海・北陸	4.0	71.1	25.0		100.0(76)
	近畿	0.0	66.7	33.3		100.0(33)
	外国	25.7	20.0	54.3		100.0(35)

注) ***は1%水準で有意であることを示す。20名以下の出身地は掲載していない。

表 2 大学生活と希望初職地

大学生生活		タイプ			カイ二乗 検定結果	合計 (括弧内人数)
		青森定着	Uターン	Iターン		
学系統	文系	5.7	64.3	30.0	***	100.0(297)
	教育学系	5.5	79.5	15.0		100.0(200)
	理系	3.3	66.1	30.6		100.0(821)
	保健学系	7.4	69.6	23.0		100.0(517)
	薬学系	0.0	90.0	10.0		100.0(10)
学年	1年生	3.9	73.7	22.4	***	100.0(647)
	2年生	5.9	70.1	24.0		100.0(471)
	3年生	3.7	65.9	30.4		100.0(352)
	4年生	7.2	59.5	33.3		100.0(375)

注) ***は1%水準で有意であることを示す。

次に、大学の専門分野と学年別に希望初職地を整理した結果を表 2 に示す。学系別に見ると、資格を要する教育学系、保健学系、薬学系ではUターンタイプの割合が高い一方で、文系および理系ではIターンタイプの割合が高いことがわかった。また、保健学系では青森定着タイプが7.4%見られ、これは地域現場体験などを通じて県内への理解と関心が高まったことが要因と考えられる。同様に、文系および教育学系でも青森定着タイプがそれぞれ5.7%と5.5%存在しており、割合としては多くないものの、地域志向教育を通じた青森県への理解向上が影響していると推測される。

学年別では、入学間もない1年生ではUターンタイプが最も多かったが、学年が進むにつれてIターンタイプおよび青森定着タイプの割合が増加していることが明らかになった。特に4年生では青森定着タイプが7.2%に達し、県内での生活や地元企業への理解が深まった結果、県内定着を希望する学生が増えたと考えられる。李・花田（2023）の分析では、県内大学生を対象とした調査を通じて、地域志向教育が県外出身者に対して一定の教育効果を持つことが明らかにされている。本調査の結果は、李・花田（2023）の分析結果と一致するものと考えられる。

3. 家族環境と希望初職地

ここでは、若者を取り巻く家族環境が初職地選択行動にどのような影響を及ぼしているのかを概観する。第2章でも述べたように、近年の少子化や多発する自然災害などから実家で、あるいは実家の近くで生活したいという地元志向は若者本人だけでなく、親世代にとっても強まっていると思われる。

表3 両親の出身と希望初職地

親の出身		タイプ			カイ二乗 検定結果	合計 (括弧内人数)
		青森定着	Uターン	Iターン		
父親	定住者	5.3	67.8	26.9	n.s.	100.0(1,037)
	移住者	4.7	69.2	26.1		100.0(808)
母親	定住者	5.2	71.2	23.6	**	100.0(941)
	移住者	4.9	65.5	29.7		100.0(904)

注) **は5%水準で有意であることを示す。

表3は、親の出身地と希望初職地の関係をまとめたものである。ここで「定住者」とは、親の出身県が若者の実家の所在県と一致している場合を指し、言い換えると、親の実家所在県と現在の実家所在県が同じであることを意味する。一方、「移住者」とは、親が別の地域出身で現在の実家所在県へ移住して定住している場合や、繰り返し移住している場合を指している。代々同じ地域で生活している場合、地域生活への慣れや人的資本の蓄積を通じて、地域への愛着や地域志向が高まることは容易に想像できる。

表3の分析結果によれば、父親の定住・移住の有無と若者の希望初職地選択行動の間に統計的に有意な関係は認められなかった。他方、母親の定住・移住の有無に関しては5%水準で有意な関係が見られた。具体的には、母親が定住者の場合、Uターンタイプの割合が71.2%であり、母親が移住者の場合の65.5%と比較して5.7ポイント高い結果となった。このことから、母親の実家の存在が若者の初職地選択行動に大きな影響を与えていること

がわかる。

さらに、第2章の分析でも同様の結果が得られており、母親が県内出身・県外出身を問わず若者の初職地選択に大きな影響を与えていることが確認された。

表4 家族環境と希望初職地

家族環境		タイプ			カイニ乗 検定結果	合計 (括弧内人数)
		青森定着	Uターン	Iターン		
三世代	1	5.6	65.8	28.6	n.s.	100.0(483)
	0	4.9	69.3	25.8		100.0(1362)
ひとり親	1	5.5	66.2	28.3	n.s.	100.0(237)
	0	5.0	68.7	26.3		100.0(1,608)
一人っ子	1	5.4	70.1	24.5	n.s.	100.0(298)
	0	5.0	68.1	27.0		100.0(1,547)
長子	1	4.8	68.2	27.0	n.s.	100.0(1,077)
	0	5.3	68.8	25.9		100.0(768)

注) 家族環境の1は特定のカテゴリに該当していることを表す。

その他の家族環境と希望初職地との関係を示したのが表4である。第2章の結果と同様に、その他の家族環境において統計的に有意な差は見られなかった。この結果の背景には、少子化による核家族化が進行したことで、親、特に母親との関係が強まり、その影響が希望初職地の選択に反映されている可能性がある。

4. 課外活動と希望初職地

次に課外活動と希望初職地の関係を見てみたい。サークルやクラブ活動、アルバイトなどは若者が最も楽しみにしている大学生活の一部である。また、近年には多発する自然災害の影響もあり、さまざまなボランティア活動に励む学生も多くなっている。このような課外活動では、同じ大学の学生同士だけでなく、地域の社会人などとも出会う貴重な出会いの場であり、県外出身の若者にとっては地域を知る貴重な場でもある。いうまでもなくアルバイトは学費や生活費を補う貴重な収入源でもある。

表 5 課外活動と希望初職地

課外活動		タイプ			カイ二乗 検定結果	合計 (括弧内人数)
		青森定着	Uターン	Iターン		
アルバイト	1	5.2	66.4	28.4	***	100.0(1,045)
	0	4.9	71.0	24.1		100.0(800)
クラブ&サークル	1	4.5	69.6	25.9	n.s.	100.0(1,282)
	0	6.2	65.7	28.1		100.0(563)
ボランティア	1	4.9	69.6	25.5	***	100.0(1,489)
	0	5.6	63.5	30.9		100.0(356)

注) ***は1%水準で有意であることを示す。課外活動の1は特定のカテゴリに該当していることを表す。

表 5 は、課外活動別に希望初職地を整理したものである。この表の分析結果によると、アルバイトとボランティア活動がカイ二乗検定で1%水準で有意であることが示された。

アルバイト経験者では、Uターンタイプの割合が未経験者より低く、代わりにIターンタイプや青森定着タイプの割合が高いことがわかった。この結果は、前章でも述べたように、アルバイトを通じて対人不安の軽減や自立への自信が高まり、移動に伴う心理的コストが低下したためと考えられる。また、アルバイト経験者については、移動に伴う心理的コストが低下しただけでなく、アルバイト収入を通じて移動に伴う経済的負担を賄うことができたことが、移動に対する障壁を低くする要因となった可能性も示唆される。

一方、ボランティア活動の経験者では、Uターンタイプの割合が69.6%と未経験者の63.5%を6.1ポイント上回った。この結果は、地域のボランティア活動を通じて地域コミュニティの良さや重要性を理解し、地域志向が高まったためと推測される。また、大学におけるボランティア活動が若者の地域コミュニティへの理解を深め、一定の教育効果を果たしていることが明らかになった。

5. 地域志向教育と希望初職地

表 6 地域志向教育と希望初職地

		地域志向教育		カイ二乗 検定結果	合計 (括弧内人数)
		3科目未満	3科目以上		
タイプ	青森定着	73.1	26.9	n.s.	100.0(93)
	Uターン	78.9	21.1		100.0(1,262)
	Iターン	76.1	23.9		100.0(490)
		地域の現場体験		カイ二乗 検定結果	合計 (括弧内人数)
		なし	あり		
タイプ	青森定着	41.9	58.1	n.s.	100.0(93)
	Uターン	40.9	59.1		100.0(1,262)
	Iターン	45.5	54.5		100.0(490)

注) カイ二乗検定では有意なものはなかった。

次に、近年各大学で積極的に取り入れている地域志向教育および地域の現場体験学習の影響について考察する。表 6 は、地域志向教育および地域の現場体験の有無と希望初職地をまとめたものである。ここで注意すべき点は、本章の分析対象者が青森県外出身者であり、地域志向教育および地域の現場体験学習が青森県に対する理解を深めることを目的とした教育プログラムであるという点である。

初職地の決定は、職場や仕事だけでなく住まいの選択を伴うため、地域への理解がその決定において重要な要素となる。しかし、大学での地域志向教育は地域理解の貴重な機会であるものの、地域の暮らしを十分に想像できるほどのプログラムとは言い難い。また、大学での 4 年間の生活が地域の暮らしを理解するうえで十分な期間であるかについては、様々な意見があると考えられる。

表 6 の結果によれば、地域志向教育と地域の現場体験のいずれについても統計的に有意な結果は得られなかった。このことから、現在各大学で行われている教育プログラムは、県外出身者の初職地選択行動においてその影響が限定的であると考えられる。ただし、第 2 章でも述べたように、この解釈には慎重な検討が必要である。今後はより詳細な分析が不可欠であるといえよう。

6. 希望産業と希望初職地

次に、希望産業別の希望初職地を整理したい。表 7 は希望産業別にタイプを分類したものである。回答は複数回答形式であり、カイ二乗検定を用いて各産業とタイプ間の統計的な有意性を検証した。

U ターンタイプが多い産業には、公務、教育・学習支援業、医療・福祉が含まれ、これらは主に資格を必要とする仕事が多いことが特徴である。また、農林漁業においても 73.3% と高い割合を示しており、本県への進学者の多くが北海道出身者であることが反映されていると考えられる。

一方、I ターンタイプが多い産業は、不動産・物品賃貸業 (44.7%)、生活関連サービス・娯楽業 (43.5%)、宿泊・飲食サービス業 (40.7%) であり、これらはサービス関連の職種が多いことを示している。青森定着タイプが多い産業としては、医療・福祉 (7.0%)、農林漁業 (6.4%)、公務 (5.3%) が挙げられる。本県における雇用の受け皿が限定的であることが、このデータから示唆される。

表 7 希望産業と希望初職地

希望産業	希望初職地			カイ二乗 検定結果	合計	
	青森定着	Uターン	Iターン		構成比	人数
公務	5.3	75.1	19.6	***	100.0	551
農林漁業	6.4	73.3	20.3	*	100.0	236
建設業	3.7	62.4	33.9		100.0	109
製造業	3.4	64.3	32.4		100.0	179
電気・ガス・水道業	3.3	62.0	34.7	*	100.0	121
情報通信業	2.4	59.6	38.0	***	100.0	208
運輸・郵便業	2.4	61.9	35.7		100.0	42
卸売・小売業	3.2	59.1	37.8	**	100.0	127
金融・保険業	3.6	64.9	31.5		100.0	111
不動産・物品賃貸業	0.0	55.3	44.7	***	100.0	47
学術研究・専門・技術サービス	2.3	63.9	33.8	***	100.0	343
宿泊・飲食サービス業	4.3	55.0	40.7	***	100.0	140
生活関連サービス・娯楽業	1.4	55.1	43.5	***	100.0	147
教育・学習支援業	3.4	77.7	18.9	***	100.0	349
医療・福祉	7.0	69.6	23.5	***	100.0	588
複合サービス業	3.5	57.5	39.1	**	100.0	87
その他	4.9	48.8	46.3	**	100.0	41

注) **、*、*印は、カイ二乗検定で1%、5%、10%水準で有意であることを示す。

表 8 希望職種と希望初職地

希望職種	希望初職地			カイ二乗 検定結果	合計	
	青森定着	Uターン	Iターン		構成比	人数
管理的な仕事	4.6	68.0	27.4		100.0	500
専門的・技術的な仕事	4.2	68.8	27.0	**	100.0	1265
事務的な仕事	4.2	69.1	26.8		100.0	482
販売の仕事	5.5	63.8	30.7		100.0	163
サービスの仕事	5.7	64.5	29.9		100.0	422
保安の仕事	6.5	66.2	27.3		100.0	77
生産工程の仕事	5.0	67.5	27.5		100.0	120
運輸・機械運搬の仕事	3.1	71.9	25.0		100.0	32
建設・採掘の仕事	4.2	60.4	35.4		100.0	48
運搬・清掃・包装等の仕事	2.9	73.5	23.5		100.0	34
その他	5.5	65.5	29.1		100.0	55

注) **印は、カイ二乗検定で5%水準で有意であることを示す。

表 9 希望初職地別希望初任給水準

(単位：万円)

	平均	標準偏差	最小値	最大値
青森定着	24.4	6.0	15.0	50.0
タイプ Uターン	23.3	5.6	11.0	50.0
Iターン	24.2	5.4	12.0	50.0

希望職種と希望初職地を整理した表 8 では、タイプ間で統計的に有意な差が見られたのは、専門的・技術的な仕事のみであった。具体的には、専門的・技術的な仕事において、Uターンタイプが 68.8%、Iターンタイプが 27.0%、青森定着タイプが 4.2%を占めた。

次に、表 9 における希望初任給の水準を見ると、青森定着タイプが最も高く 24.4 万円、Iターンタイプが 24.2 万円、Uターンタイプが最も低く 23.3 万円であることがわかった。これは、実家を離れる場合に発生する移動費用や一人暮らしの経済的負担が、希望初任給を押し上げる傾向にあるためと考えられる。また、実家の所在県に Uターンする場合は心理

的な安心感や親などからの経済的な援助が賃金格差を補う可能性があることを示唆しているといえる。

表 10 希望初職地別希望理由

(複数回答)

希望理由	希望初職地		
	青森定着	Uターン	Iターン
自分の能力が活かせそうだから	24.7	13.6	27.3
希望する企業があるから	30.1	18.3	45.3
知人が多いから	26.9	33.0	11.6
親や家族を支えたいから	19.4	47.1	7.1
出身地域が好きだから/その地域が好きだから	9.7	65.1	26.5
就職後の生活が精神的に楽だと思うから	14.0	29.8	14.3
希望する給与や待遇が期待できるから	8.6	11.6	41.2
物価が安く、経済的な負担が少ないから/出身地域と別の場所で生活してみたいから	14.0	1.7	36.1
親と家族の勤めで	4.3	6.4	2.9
奨学金を借りているから	10.8	4.8	3.3
住み慣れていて便利だから/都会の方が便利だから	29.0	21.2	49.2

次に、表 10 で各タイプ別に初職地を選択した理由を見ていくと、Uターンタイプで最も多い理由は「その地域が好きだから」(65.1%)であった。次いで「親や家族を支えたいから」(47.1%)、「知人が多いから」(33.0%)が挙げられた。これらの結果から、青森県出身者と同様に、実家の所在県へのUターンの主な理由は環境要因であることがわかる。

続いて、Iターンタイプの理由を見ると、「都会の方が便利だから」(49.2%)、「希望する企業があるから」(45.3%)、「希望する給与や待遇が期待できるから」(41.2%)が挙げられた。この結果は、Iターンタイプの主な理由が都会の利便性や労働条件に関連していることを示している。

最後に、青森県定着タイプを見ると、「希望する企業があるから」(30.1%)、「住み慣れていて便利だから」(29.0%)、「知人が多いから」(26.9%)が主な理由として挙げられた。このことから、希望する企業との出会いが定着の理由になり得ることが示されている。また、住み慣れた環境や知人の存在が定着を促す要因になっていることがわかる。

7. 就職活動の情報源と希望初職地

表 11 情報源と希望初職地

(複数回答)

情報源	タイプ		
	青森定着	Uターン	Iターン
新聞・雑誌・企業のパンフレット	41.9	35.1	38.4
インターネットの求人情報	58.1	71.6	75.3
ハローワーク、ジョブカフェなど	8.6	10.0	8.8
民間の職業紹介所	4.3	5.5	5.7
合同会社説明会のようなイベントで	22.6	22.4	27.1
学校の就職支援センターなど	38.7	38.7	38.0
両親の紹介	9.7	12.8	6.5
両親以外の家族、親戚の紹介	3.2	4.4	3.5
親しい友人の紹介	6.5	7.4	9.0
あまり親しくない知り合いの紹介	2.2	0.3	1.8
その他	3.2	2.4	1.0

ここでは、学生が就職活動に関する情報をどのように入手しているのかに注目してみた。表 11 は、入手方法について複数回答形式で回答した結果を整理したものである。表から、UターンタイプとIターンタイプにおいては、7割以上がインターネットの求人情報に依存していることがわかる。出身県を離れて生活している県外出身者にとって、インターネットの情報は住んでいる場所に拘らず情報を得られる重要な情報源であることがわかる。

一方、青森定着タイプはインターネットの求人情報への依存が相対的に低く、新聞・雑誌・企業のパンフレットや学校の就職支援センターなどへの依存度が高いことがわかる。また、県内企業に関する情報が不十分な県外出身学生にとって、企業パンフレットや学校の就職支援センターは県内企業について知るための貴重な情報源であることがわかる。

8. 小括

この章では、県外出身者を対象に、個人属性、家族環境、大学生活、希望労働条件に注目し、希望初職地の選択行動を分析した。

分析の結果、以下のことが明らかになった。出身地別に見ると、青森県より経済状況が良いと思われる北海道、宮城県、関東・甲信越の出身者に U ターン希望者が多いことが判明した。また、家族環境では、母親が定住者である場合に U ターンタイプが多いことが確認された。さらに、大学生活では、理系学生に I ターンタイプが多く、保健学系では青森定着

タイプが比較的多いことが明らかになった。産業別では、生活関連サービス業・娯楽業に I ターンタイプが多く、公務、医療・福祉関連産業に青森定着タイプが多い傾向が見られた。

以上の結果から、県外出身者が学卒後に青森県内に定着する可能性は低いと言わざるを得ない。しかし、全体の約 5.0%前後ではあるものの、学卒後に県内を選択しようとしている学生が一定数いること、さらに「希望する企業があるから」といった理由を挙げていることから、県外出身者に対して県内企業の情報を的確に届けることが有効であると考えられる。せっかく青森県を選んで来てくれた若者たちが、学卒後にも自ら喜んで選び続けてくれるような環境整備が急務である。

【参考文献】

李永俊・花田真一（2023）「地方大学における地域志向教育の教育効果を検証する」『地域未来創生センタージャーナル』第 9 号、 pp.5-12

奥田純子（2023）「県外進学した大卒者の初職時 U ターン移動分析—経済的要因の男女差に着目して—」『人口学研究』59 巻、 pp. 8-23

第4章 初職地選択行動の決定要因

李 永 俊

1. はじめに

本章では、構造モデルを用いて学生の初職地選択行動の決定要因を明らかにする。若者の地域間移動に関する多くの先行研究では、地域間の賃金格差、雇用機会の格差、アメニティ（文化施設、遊び場、教育施設など）の差、そして未知の生活への憧れなどが主な理由として挙げられている。ただし、昨今の全国的な人手不足により、雇用機会の格差および賃金格差は大幅に縮小している。また、IT技術の発展に伴うネットショッピングや仮想空間の利活用が高まり、利便性の格差も一定程度縮小している。にもかかわらず、大卒者の県外就職は歯止めがかからない状況が続いている。そこで、今までは注目していなかった個人の取り巻く社会経済環境や教育課程における様々な経験から形成される地元に対する意識に注目し、初職地選択行動の決定要因を明らかにする。

第2章で述べたように出身地によって、初職地選択行動が大きく異なっていることが明らかになっている。そこで本章では、青森県内出身者（3,090名）に分析対象を絞って分析を行う。また、希望初任給が15万円未満と41万円以上（322名）、そして各変数の欠損値（12名）を取り除いた2,756サンプルを用いて分析を行う。

2. 構造モデル

ここでは、図1に示すような構造モデルを想定している。若者を取り巻く社会経済環境や教育、小中高の教育課程での経験、さらには地域で形成された人間関係、すなわち社会関係資本が、若者の地元に対する意識を形成していると考えられる。本調査では、地元意識を「青森県（現在住んでいる地域）」に対する意識として、以下の5つの尺度で測定した：「私は地域の一員であると感じる（以下、一員）」「私はこの地域に愛着を感じる（以下、愛着）」「この地域を離れることは困難である（以下、困難）」「これからもこの地域とかわりを持ち続けたい（以下、かわり）」「この地域は10年後も今と同じくらい賑やかであると思う（以下、10年後）」。これらの質問には、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で回答を求めた。また、「現在、あなたはどの程度『幸せ』だと感じますか」という質問を設け、「幸せ」を10点、「不幸」を1点とする尺度で回答を得て「幸福度」を測定した。

本調査の仮説は、これらの地元意識の尺度および現在の生活における「幸福度」が高いほど、地元での就職を選択しやすいというものである。また、これらの地元意識や「幸福度」は、若者の個人属性、家族環境、教育、経験、そして社会関係資本によって決定されると仮

定した。

中畠（2020）は、若者のキャリア形成や地域志向を評価するため、「地元への愛着」を地域評価の指標として用い、その基本構造を検証している。彼は教育学、心理学、社会福祉学、社会学、都市計画、公衆衛生など多領域の先行研究を基に、地元就業に関わる地元愛着の要因を探索的に検討した。独自のアンケート調査に基づく階層的分析の結果、新規学卒者が地元で就職する際、地元愛着が地元定着を促進する効果を持つことを明らかにしている。さらに、UJI ターン（都市部から地方への移住）の決定要因や地元愛着の階層構造についても、多くの知見を示している。

しかし、中畠（2020）の研究では、小中高の教育課程での経験や地域志向教育の影響は考慮されていない。この点に注目した研究として、小山（2017）および李・山口（2019）が挙げられる。小山（2017）と李・山口（2019）は、それぞれ徳島県と青森県のデータを用いて、大学での地域志向教育が地元愛着を高める一定の効果を持つものの、地元での就職意向を直接高めるには至らなかったと結論付けている。また、李・花田（2023）は、小中高における地域体験学習が地元愛着を有意に高めることを示している。ただし、いずれの研究もデータ数が限定的であり、ロバスト性については十分に検証されていない。

以上の背景を踏まえ、中畠（2020）でも指摘されているように、地元要因について地域性や個人レベルでキャリア形成の視点から論じた研究は依然として少ない。若者の価値観が多様化する現代において、多様な可能性を考慮した探索的な研究の蓄積が求められる。本章の分析は、その試みの一環である。本調査では、中畠（2020）と李・花田（2023）の分析結果を踏まえ、初職地選択行動との関連性が深かった 5 つの心理変数を用いた。これらの変数は、中畠（2020）が提唱した「生存」「関係」「成長」の枠組みに基づいて選定したものである。

図 1 構造モデル

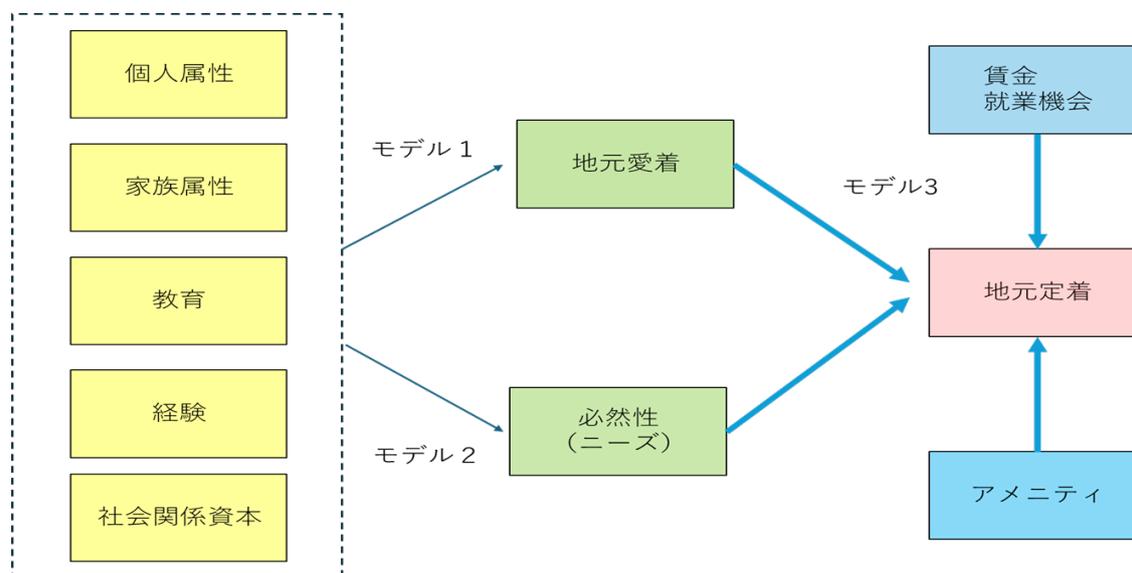


表 1 用いる変数一覧

変数群	変数名
個人属性	男性ダミー
家族属性	父親県内出身ダミー, 母親県内出身ダミー, 三世代ダミー, 一人っ子ダミー, 長子ダミー
教育	教育学系ダミー, 理系ダミー, 保健学系ダミー, 薬学系ダミー, 2年生ダミー, 3年生ダミー, 4年生ダミー, 地域志向教育ダミー, 地域体験学習ダミー, アルバイトダミー, ボランティアダミー, クラブ・サークルダミー
経験	小中校: 野外で炊事など, インターンシップ, 地域の祭り参加, 地域のイベント参加, 地域のイベント手伝い
社会関係資本	金銭的な支援: 家族・親族, 友人・知人, 近隣住民 人間関係支援: 家族・親族, 友人・知人, 近隣住民 精神的な支援: 家族・親族, 友人・知人, 近隣住民

図 1 の構造モデルは、以下の 2 段階で推計を行った。第一段階推計では、被説明変数として若者の地元意識を表す 5 つの心理変数および幸福度を設定し、説明変数として個人属性、家族属性、教育、経験、社会関係資本を用いた。これらの変数に基づき、最小二乗法で推計を実施した。具体的な変数は表 1 に示す。

第二段階推計では、希望初職地が地元か否かを示すダミー変数を被説明変数とし、プロビットモデルで推計を行った。説明変数としては、第一段階推計で得られた 5 つの心理変数と幸福度の予測値に加え、労働市場の条件として希望初任給、さらに雇用機会を表す 6 つの産業ダミー変数を使用した。

3. 基本統計量

表 2 は、5 つの心理変数および幸福度の基本統計量を示している。まず、希望初職地については、59.0%が県内を、41.0%が県外を希望していることがわかる。希望初職地別の心理変数の平均値を比較すると、以下の通りである。

「一員」は県内希望者の平均は 3.85、県外希望者の平均は 3.51 で、県内希望者の方が 0.34 ポイント高い。「愛着」は県内希望者の平均は 4.13、県外希望者の平均は 3.56 で、県内希望者が 0.57 ポイント高い。「困難」、「かかわり」、「10 年後」についても、すべて県内希望者の平均値が県外希望者を上回っている。さらに、カイ二乗検定の結果、これらの差は全て 1%

水準で有意であった。これにより、県内希望者はすべての項目において地元意識が県外希望者より有意に高いことが示された。

表 2 基本統計量（第一段階推計）

	希望初職地		χ^2 値	df	有意水準	最小値	最大値
	県内 (n=1623)	県外 (n=1133)					
県内県外ダミー	0.59	0.41				0	1
地域の一員	3.85	3.51	49.20	4	p<.01	1	5
地域に愛着	4.13	3.56	179.10	4	p<.01	1	5
地域を離れることは困難	3.32	2.09	591.30	4	p<.01	1	5
かかわりをもちたい	4.03	3.16	375.60	4	p<.01	1	5
10年後も同じくらい賑やか	2.81	2.31	108.75	4	p<.01	1	5
現在の幸福度	7.10	7.00	15.86	9	p<.10	1	10

表 3 基本統計量（第二段階推計）

	希望初職地		χ^2 値	df	有意水準	最小値	最大値
	県内 (n=1623)	県外 (n=1133)					
初任給（対数値）	1.35	1.37				1.2	1.6
公務ダミー	0.68	0.32	36.88	1	p<.01	0	1
情報通信業	0.40	0.60	46.04	1	p<.01	0	1
学術研究・専門・技術サービス業	0.45	0.55	22.28	1	p<.01	0	1
宿泊・飲食サービス業	0.53	0.47	3.87	1	p<.05	0	1
生活関連サービス業	0.44	0.56	21.57	1	p<.01	0	1
教育・学習支援業	0.68	0.32	26.98	1	p<.01	0	1
医療・福祉	0.64	0.36	18.14	1	p<.01	0	1

続いて、第二段階推計で用いた労働市場条件などの基本統計量が表 3 である。まず希望初任給を見ると、県内希望者が対数変化値で 1.35、県外希望者が 1.37 で県外希望者の希望初任給が高くなっていることがわかる。続いて、雇用機会の代理変数として用いた産業ダミーをみると、県内希望者が高いのは、公務（0.68）、教育・学習支援業（0.68）、医療・福祉

(0.64) で、県外希望者が高いのは情報通信業 (0.60)、生活関連サービス業 (0.56)、学術研究・専門・技術サービス業 (0.55) であった。いずれも 1%水準で有意で、希望初職地によって希望初任給水準や希望産業が異なることがわかる。

次に、5つの心理変数は互いに強く相関することが予想されたため、多重共線性を回避するために変数間の相関係数を確認し、相関係数が 0.80 以上であった「一員」(「愛着」と 0.90)、「かかわり」(「一員」と 0.80、「愛着」と 0.93) を取り除いて推計を行った。

4. 推計結果

第一段階推計の推計結果が表 4 である。推計結果に用いた個人属性 (1)、家族属性 (5)、学校生活 (13)、小中高経験 (15)、社会関係資本 (9) の 43 個の説明変数のうち、有意な変数のみを表にしている。

まず、「愛着」に注目すると、家族属性としては母親県内出身ダミーが 1%水準で有意で、正の係数を示している。つまり、母親が県内出身であれば若者の地元愛着が高くなることがわかる。続いて、小中高の経験では、イベント手伝い、祭りが有意で、正の係数を示しており、地域経験が愛着を高めていることがわかる。社会関係資本では友人・知人、近隣住民との良好な関係が地域への愛着に大きく関連していることが示された。逆に理系ダミーは負で有意となっており、理系学生の愛着が他の学系より低くなっていることがわかる。

「困難」については、母親県内出身ダミーが正で有意となっている。学系では教育学系が正で有意となっており、資格系の学系では地域間移動に困難さがあることがわかる。他方、アルバイトダミーは負で有意となっており、自分で経済的に自立できる見込みが困難さを軽減していることがわかる。社会関係資本では、人間関係について相談できる相手として近隣住民が負で有意となっており、近隣住民との良好な関係が困難さを軽減していることがわかる。

次に「10 年後」では、母親県内出身ダミーの係数が正で有意であった。教育系ダミーも同様に正の影響を示していた。祭りや近隣住民からの金銭的援助も「10 年後」を高める結果が得られた。「幸福度」に関しては、近隣住民との良好な関係が幸福度を高める上で重要な要因であることが示された。ただし、近隣住民からの支援が有意な影響を示したとしても、対象者数が少ないため、この影響を一般化するには慎重な検討が求められる。

第一段階推計を総括すると、母親が県内出身であることは多くの心理変数において正の効果が見られた。金銭的・精神的援助においては、近隣住民や友人・知人の影響が顕著であった。イベント手伝いや祭りなどの地域活動への参加が若者の地域意識や幸福度にポジティブな影響を与える結果が得られた。

表 4 第一段階推計結果

	愛着		困難		10年後		幸福度	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差
男性ダミー	0.003	0.053	0.035	0.059	0.217 ***	0.057	0.010	0.086
母親県内出身ダミー	0.139 ***	0.045	0.233 ***	0.050	0.165 ***	0.048	-0.089	0.073
教育系ダミー	0.087	0.072	0.183 **	0.080	0.344 ***	0.078	0.008	0.118
理系ダミー	-0.146 **	0.067	-0.363 ***	0.074	-0.058	0.072	-0.088	0.109
医療保健系ダミー	-0.078	0.063	-0.045	0.071	0.155 **	0.068	0.033	0.103
2年生ダミー	0.039	0.058	0.076	0.065	-0.020	0.063	-0.177 *	0.095
3年生ダミー	0.006	0.067	-0.017	0.074	-0.191 ***	0.072	-0.308 ***	0.109
地域志向教育（残差）	-0.008	0.055	0.016	0.061	0.014	0.059	-0.161 *	0.089
アルバイトダミー	-0.063	0.049	-0.191 ***	0.055	0.087 *	0.053	0.309 ***	0.080
クラブダミー	0.100 **	0.047	-0.064	0.052	-0.056	0.050	0.125 *	0.076
小学校								
野外での炊事など	0.023	0.053	-0.012	0.059	-0.052	0.058	0.227 ***	0.087
祭り	-0.019	0.072	-0.111	0.080	-0.281 ***	0.077	-0.148	0.117
イベント参加	0.039	0.067	0.116	0.075	0.153 **	0.073	0.137	0.110
イベント手伝い	0.095 *	0.055	-0.031	0.061	-0.049	0.059	-0.027	0.090
中学校								
野外での炊事など	-0.119 *	0.066	-0.051	0.073	0.019	0.071	-0.101	0.107
インターンシップ	-0.092	0.061	-0.207 ***	0.068	-0.032	0.066	-0.157	0.099
高校								
野外での炊事など	0.109	0.068	0.100	0.076	0.184 **	0.073	0.173	0.111
インターンシップ	-0.023	0.081	0.058	0.090	0.055	0.088	0.221 *	0.132
祭り	0.126 **	0.061	-0.051	0.068	0.038	0.065	0.082	0.099
金銭的援助								
家族・親族	0.189 *	0.101	0.104	0.112	0.085	0.109	0.432 ***	0.164
近隣住民	0.331 ***	0.066	0.300 ***	0.073	0.259 ***	0.071	0.659 ***	0.107
人間関係援助								
家族・親族	-0.142 **	0.068	-0.009	0.075	0.073	0.073	0.039	0.110
友人・知人	0.140 **	0.069	0.107	0.077	-0.045	0.074	0.389 ***	0.112
近隣住民	0.055	0.068	-0.257 ***	0.075	0.182 **	0.073	0.291 ***	0.110
精神的援助								
友人・知人	0.857 **	0.394	-0.244	0.439	0.126	0.425	-0.254	0.642
近隣住民	-0.658 **	0.318	0.384	0.355	-0.012	0.344	0.363	0.519
定数項	3.098 ***	0.142	2.748 ***	0.159	1.915 ***	0.154	5.444 ***	0.232
サンプル数	2756		2756		2756		2756	
修正済み決定係数	0.056		0.044		0.042		0.066	

注) **、*印は1%、5%、10%水準で有意であることを示す。

表 5 第二段階推計結果

	県内希望有無		県内希望有無			
	係数	標準誤差	係数	標準誤差		
愛着	0.056	**	0.024	0.044	*	0.025
困難	0.478	***	0.024	0.458	***	0.025
10年後	0.014		0.023	0.019		0.023
幸福度	-0.004		0.014	-0.008		0.014
初任給（対数値）				-1.942	***	0.369
公務ダメー				0.328	***	0.062
情報通信業				-0.286	***	0.090
学術研究・専門・技術サービス業				-0.241	***	0.091
宿泊・飲食サービス業				-0.142		0.091
教育・学習支援業				0.253	***	0.068
医療・福祉				0.290	***	0.061
定数項	-1.289	***	-1.289	1.281	***	0.522
サンプル数	2756		2756			
Pseude R2	0.170		0.200			

注) **、*印は1%、5%、10%水準で有意であることを示す。

第二段階推計結果が表 5 である。モデル 1 の推計では、心理変数と幸福度のみを被説明変数とした結果である。「愛着」は係数が正で、5%水準で有意な結果となった。つまり、地域への愛着が強い人ほど、県内就職を希望する傾向が明らかになった。この結果は、地域に対する心理的な結びつきが就職先の選択に影響を与えることを示している。

続いて、「困難」は1%水準で有意で、係数が正となっており、地域を離れることに困難度が高いと感じている人は、県内就職を希望する割合が非常に高くなることが明らかになった。この傾向は、困難を感じる場合に地元での就職を志向する現象を示している。「10年後」と「幸福度」は、県内就職希望に有意な関連は見られなかった。

続いて、労働市場の条件を加えたモデル 2 の結果を見てみよう。まず心理変数と「幸福度」については、モデル 1 と同様、「愛着」と「困難」が正の係数で有意となっており、労働市場条件を加えても地域との心理的なつながりが地元就職の重要な決定要因となることがわかる。

続いて、労働市場条件について見ると、初任給の高い職業に就く人ほど、県内就職を希望する割合が低くなる傾向が確認された。高い初任給を得られる職業を志望する場合、県外での就職を選択する傾向があると考えられる。雇用機会では、公務員を志望する人は、県内就職を希望する割合が高いことが明らかになった。情報通信業および学術研究・専門・技術サービス業の分野では、県内就職希望が低く、教育・学習支援業や医療・福祉分野では、県内

就職希望が高いことが確認された。

以上の分析結果から、県内就職希望に影響を与える要因として、愛着や困難度、公務員志望、特定の職業分野（教育・医療など）が強い関連を持つことが明らかになった。一方で、初任給の高さは県外就職を選択する要因の一つとなり得ることが示唆された。この結果は、地域定着政策の設計や雇用支援策を検討する際に重要な示唆を提供している。

表 6 階層的分析推定結果

	県内希望有無 (奨学金利用有り)		県内希望有無 (奨学金利用無し)			
	係数	標準誤差	係数	標準誤差		
愛着	0.020	0.031	0.086	**	0.043	
困難	0.468	***	0.031	0.445	***	0.042
10年後	-0.003	0.029	0.076	*	0.041	
幸福度	0.002	0.017	-0.029		0.025	
初任給（対数値）	-1.710	***	0.456	-2.644	***	0.632
公務ダメー	0.310	***	0.077	0.386	***	0.105
情報通信業	-0.346	***	0.114	-0.213		0.146
学術研究・専門・技術サービス業	-0.122		0.115	-0.477	***	0.150
宿泊・飲食サービス業	-0.103		0.113	-0.249		0.153
教育・学習支援業	0.276	**	0.086	0.198	*	0.112
医療・福祉	0.333	***	0.074	0.173		0.108
定数項	0.965		0.642	2.221	**	0.897
サンプル数	1790		968			
Pseude R2	0.073		0.230			

注) **、*印は1%、5%、10%水準で有意であることを示す。

5. 階層的分析

本節では、若者を取り巻く社会経済環境、特に経済状況によって選択行動が異なることを想定し、階層的な分析を行う。地域間の移動には引っ越し費用を含め直接的な費用が必要となる。そのため、経済的に余裕がない若者は移動を諦めなければならないか、あるいは移動

費用を補う十分な経済的な利得がなければならない。そのため、労働条件が重要な決定要因となりうる。他方、経済的に余裕がある層は、移動費用を十分に負担できると仮定しているため、地元と県外を自由に選択できると想定する。また、経済的に余裕があるため、金銭的な理由で移動を選択する可能性は低いと考えられる。ただ、希望する仕事の有無は重要な選択要因となりうる。そして自由に選択が可能であるため、地域への愛着などの心理的な要因が地元定着の重要な要因となりうる事が予想される。

今回の調査では、経済状況についての質問項目を設けていなかったため、経済状況の代理変数として奨学金の利用有無を用いた。奨学金を利用する層を経済的にゆとりがない層とした。推計結果は表 6 の通りである。

奨学金を利用している経済的にゆとりがない層では、以下のような特徴が見られた。心理変数の「愛着」は統計的に有意な影響を示さず、「愛着」が初職地選択に影響を与えない可能性が示唆された。「困難」が非常に強い正の影響を示しており、困難さが地元の就職を求める動機となる可能性を示唆している。

労働市場要因では、初任給の高さが県内希望を抑制する要因として強く働いており、移動費用を補える十分な給料を求めていることがわかる。産業ダミーでは 公務員や医療・福祉職に対して強い志向が確認され、資格系の職種が、経済的にゆとりがない層の初職地選択に影響を与えていることがわかる。

奨学金を利用していない経済的にゆとりがある層では、「愛着」が統計的に有意であり、経済的にゆとりがある層の県内就職希望の重要な要因となっていることがわかる。「困難」は奨学金利用者と同様に強いものの、やや低い値を示しており、非利用者が就職活動において多少の柔軟性を持つ可能性が示された。

産業ダミーでは、学術研究や情報通信業において県外志向が強いことから、奨学金非利用者が専門性の高いキャリアに向けた志向を持つ傾向が見られた。つまり、雇用機会の有無が移動有無を決定する重要な要因であることが伺える。

以上の分析結果から、若者を取り巻く経済状況の違いによって初職地選択の決定要因が異なることが明らかになった。経済的にゆとりがない層は、「困難」と初任給の高さが重要な決定要因であるのに対し、経済的にゆとりがある層は、「愛着」と雇用機会が重要な決定要因となっていることがわかる。

6. 小括

この章では、個人の取り巻く社会経済環境や教育課程における様々な経験から形成される地元に対する意識に注目し、初職地選択行動の決定要因を、構造モデルを用いて分析した。

分析の結果、家族属性では母親が、経験では地域イベントや祭りなどの経験が、社会関係資本では友人・知人や近隣住民との良好な関係が地域への愛着を高め、地域の愛着の高さが

労働市場条件をコントロールしても地元就職を後押ししていることが明らかになった。また、若者がおかれている経済状況では、経済的にゆとりがない層は「困難」と経済的な困難さを補う金銭的な条件が重要で、経済的にゆとりがある層では「愛着」と雇用機会が重要な要因となっていることが示された。

分析結果から、若者の地元定着のためには、心理的な側面と経済的な側面を総合的に捉えたアプローチが必要であることが示された。心理的要因としては、地元愛着を高めるための施策、具体的には祭りや地域イベントなどに主体的に参加できるような環境づくりなどが、長期的には若年層の地域定着を促進する可能性がある。他方、経済的環境の整備としては初任給の向上や、地域内で安定した雇用を提供する環境整備が重要で、特に地域密着型の職業におけるサポートが鍵となりうる。

【参考文献】

李永俊・花田真一（2023）「地方大学における地域志向教育の教育効果を検証する」『地域未来創生センタージャーナル』第9号、pp.5-12

李永俊・山口恵子（2019）「大学における地域志向教育が地域愛着と就職地選択意識に及ぼす影響：弘前市における大学生への質問紙調査より」『都市社会研究』（11）、pp. 61-74

小山治（2017）「地域教育は地元キャリア形成に貢献するのかー地域移動類型ごとの初職・現職の所在地に着目して」『都市社会研究』（9）、pp. 157-171.

中畠剛（2020）「地元愛着の階層性と就業構造」『経済学論叢』65(4)、pp. 973-996

1. 本章の概要

本章では、主成分分析を用いて県内出身学生の企業イメージおよび就職先選択理由に関する評価軸を明らかにした。主成分分析は、データの次元を縮約する統計手法の一つであり、回答者の回答パターンに基づいて主要な評価基準を抽出するものである。本調査では、就業地の選択理由や企業イメージに関する質問データを多次元データとして扱い、回答パターンの特徴を2次元または3次元に圧縮して可視化した。

本章では、以下の4つの分析を行った。まず、県内企業イメージについて主成分分析を行い、県内就職希望者と県外就職希望者の間でどのような認識の違いがあるかを明らかにした。次に、就職先を選択する際に重視する要素について主成分分析を行い、県内就職希望者と県外就職希望者の評価軸の差異を検討した。さらに、県内就職希望者を対象に、就業地選択理由に関する主成分分析を行い、想定しているライフステージや幸福度の違いが選択理由に与える影響を分析した。最後に、県外就職希望者の就業地選択理由について主成分分析を行い、県内就職希望者の場合と同様にライフステージや幸福度の影響を考察した。

分析の結果、以下のことが明らかになった。県内企業イメージについては、「イメージの有無」「ポジティブな印象」「ネガティブな印象」の3つの軸が抽出され、県内就職希望者はポジティブな印象を強く持つ一方で、県外就職希望者はネガティブな印象をより強く認識していることが示された。また、就職先選択理由に関しては、県内就職希望者では「地域密着性」や「家族支援」を重視する傾向がある一方で、県外就職希望者は「経済的条件」や「福利厚生」を優先する傾向が確認された。さらに、ライフステージや幸福度の違いが就業地選択に与える影響として、結婚や子育てを想定している層は地域や家族とのつながりを重視する一方で、転職や定年退職を想定している層は柔軟な価値観を持つ傾向が明らかになった。

本章の構成は以下の通りである。第2節では、本調査で用いたデータおよび主成分分析の手法を説明する。第3節では、主成分分析の結果を詳細に示す。最後に、第4節で本章全体のまとめを行う。

2. 分析手法

本章の対象データは青森県出身者を抽出したものである。具体的には、県内企業イメージに関する分析ではデータ全体を用い、就業希望地選択理由に関する分析では、対象者を県内

就職希望者と県外就職希望者に分けて、それぞれの群に対して分析を行った。

主成分分析 (Principal Component Analysis, PCA) は、多次元データをより少ない次元に圧縮するための統計的手法である。この手法は、複数の変数間に存在する相関を考慮し、新たな直交座標系 (主成分) を構築することでデータの構造を簡潔に表現するものである。主成分は、データの分散を最大限に保持するように設計されており、第一主成分がデータの分散を最も多く説明し、続く主成分がその次に多くの分散を説明する。

PCA の具体的な手順としては、まず、観測値から変数間の共分散行列 (または相関行列) を計算する。その後、この行列の固有値分解または特異値分解を行い、各主成分に対応する固有ベクトルと固有値を求める。固有ベクトルは主成分の方向を示し、固有値は各主成分が説明する分散の割合を示す。

本調査では、県内出身学生の企業イメージおよび就業地選択理由を分析するために PCA を適用した。企業イメージについては、Q44 の 13 の選択肢を用い、データ全体を対象に分析を行った。就業地選択理由については、県内就職希望者には Q40 の 11 の選択肢、県外就職希望者には Q42 の 11 の選択肢を用いて、それぞれ分析を行った。これにより、回答者の回答パターンの背後にある主要な評価基準を明らかにし、県内就職希望者と県外就職希望者の間での評価軸の差異や傾向を可視化することを目的とする。

なお、主成分分析では累積寄与率が 70% を超えるまでの主成分軸を選択するのが一般的である。しかし、本調査では解釈のしやすさと可視化の容易さを優先し、3 次元までの主成分に縮約する方法を採用した。なお、より多次元の結果については付録にて示す。

3. 分析結果

3-1. 県内企業に対するイメージ

まず、県内企業に対するイメージについて主成分分析を行った。主成分負荷の詳細については、第 3 主成分までを表 1 に示している。また、主成分分析の結果を視覚的に把握するためのバイプロットを図 1 に示している。これらを基に、それぞれの主成分軸が回答者の認識や重視するポイントをどのように反映しているかを明らかにした。

表 1：県内企業に関する主成分負荷（第 3 主成分まで）

変数名	PC1	PC2	PC3
小規模・零細な企業が多く、大企業が少ない	<u>-0.540</u>	0.009	<u>-0.750</u>
地域に密着した仕事に携われる	-0.145	<u>0.772</u>	0.005
アットホームで親しみやすい雰囲気がある	0.058	<u>0.493</u>	0.274
労働条件（賃金や福利厚生など）が悪い	<u>-0.536</u>	-0.150	<u>0.489</u>
将来性がなく、時代に合った仕事が少ない	<u>-0.354</u>	-0.196	0.275
研究開発や企画部門が少ない	-0.247	0.012	0.078
下請けが多い	<u>-0.308</u>	-0.016	0.092
技術力・専門性がある	0.000	0.000	0.000
経営が不安定で計画性がない	-0.180	-0.068	0.142
仕事にやりがいや誇りを持てる	-0.011	0.123	0.082
女性労働者が多い	-0.016	0.032	0.022
ワークライフバランスを実践できる	-0.001	0.113	0.052
特にイメージはない	0.288	-0.255	0.047
累積寄与度	0.243	0.411	0.523

※主成分負荷の絶対値が 0.3 を越えたものについて下線を付している

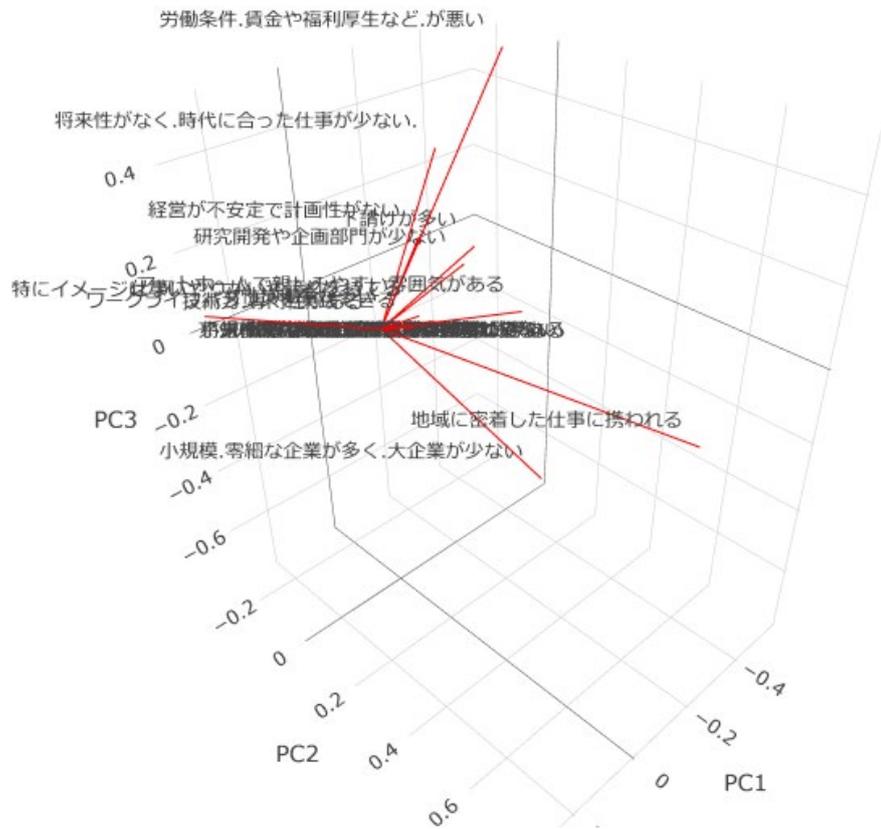


図 1：企業イメージに関するバイプロット

その結果、第 1 主成分は企業に対するネガティブな要素を反映しており、小規模性、労働条件の悪さ、将来性の欠如といった項目が大きく寄与していることがわかった。この軸は、企業の構造的課題や否定的なイメージに関連し、企業選択時のリスク認識を示す評価基準と考えられる。第 2 主成分は、地域密着性や職場の親しみやすさを評価する要素を反映しており、「地域に密着した仕事に携われる」「アットホームで親しみやすい雰囲気がある」といったポジティブな項目が高い負荷を示している。この軸は、地域志向の働き手にとって特に重要な基準となっている。第 3 主成分は、労働環境の特性を反映しており、親しみやすさや労働条件の悪さ、将来性の欠如といった環境要因が混在している。この軸は、働き手が労働環境の総合的な側面を評価する際の基準と考えられる。

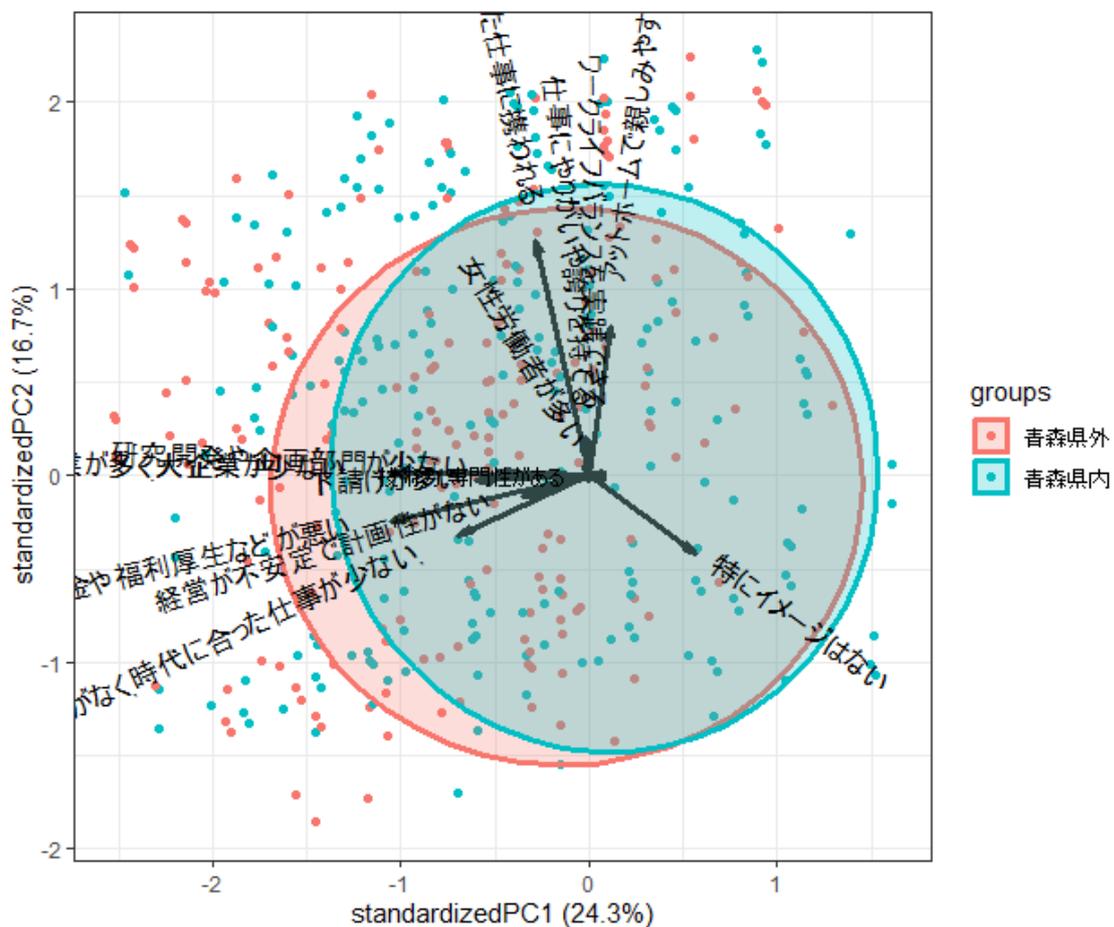


図 2：希望就職地と主成分

次に、図 2 に希望就職地ごとの回答者の分布を第 1 主成分および第 2 主成分に重ねたものを示す。このバイプロットは、第 1 主成分 (PC1) および第 2 主成分 (PC2) の座標軸上に、青森県内企業を希望するグループ (青色) と県外企業を希望するグループ (赤色) を重ねたものである。各グループの分布や変数の方向性から、以下の点が読み取れる。

まず、第 1 主成分は 24.3%の分散を説明しており、前述のようにネガティブな要素が強く寄与している。この軸上では、青森県内企業を希望するグループが全体的に右側に位置し、ポジティブな印象を持っていることを示唆している。一方、県外企業を希望するグループは左側に分布し、ネガティブな印象を持つ傾向が見られる。

次に、第 2 主成分は 16.7%の分散を説明しており、前述のように地域密着性や親しみやすさといったポジティブな要素が強く寄与している。この軸上では、両グループの分布に顕著

な差は見られないが、県内企業を希望するグループは「地域密着した仕事に携われる」や「アットホームで親しみやすい雰囲気がある」といった変数の方向に近い位置に分布している。これに対し、県外企業を希望するグループは「労働条件の悪さ」や「経営の不安定性」といったネガティブな要素の方向に近い位置に分布している。

また、図全体から、県内企業を希望するグループは「地域密着性」や「親しみやすさ」といった軸でポジティブな印象を形成していることが読み取れる。一方で、県外企業を希望するグループは「労働条件」や「将来性」といった経済的・職業的条件に対するネガティブな評価が、希望地の選択に影響を及ぼしている可能性がある。

表 2：各グループの重心の位置

	PC1	PC2	PC3
青森県内	0.052	0.021	-0.034
青森県外	-0.078	-0.032	0.050

さらに、第 3 主成分までの各グループの重心の位置を示したものが表 2 である。この表から、青森県内企業を希望するグループと県外企業を希望するグループの回答の平均的な位置の違いが明らかになっている。

まず、第 1 主成分では、青森県内企業を希望するグループが正の値を示しており、ポジティブな印象がやや強いことを示している。一方で、県外企業を希望するグループは負の値を示しており、ネガティブな印象がやや強い傾向が読み取れる。

次に、第 2 主成分では、青森県内企業を希望するグループがわずかに正の値を示し、地域密着性や親しみやすさに対する重視が示唆される。一方で、県外企業を希望するグループは負の値を示しており、地域密着性や親しみやすさへの関心が相対的に低い可能性がある。

最後に、第 3 主成分では、県外企業を希望するグループが正の値を示し、労働環境の物質的な条件や将来性への関心が相対的に高いことが示唆される。一方で、青森県内企業を希望するグループは負の値を示しており、この要素に対する優先度がやや低いと考えられる。

これらの結果から、青森県内企業を希望するグループは地域密着性やポジティブな職場環境を重視している一方で、県外企業を希望するグループは労働環境や将来性に対する関心が高いことが分かる。

3-2. 就職先を選ぶ際に重視する要素

次に、就職先を選ぶ際に重視する要素について主成分分析を行った。主成分負荷の詳細については、第 3 主成分までを表 3 に示している。また、主成分分析の結果を視覚的に把握するためのバイプロットを図 3 に示している。

表 3：就職先の選択で重視する要素に関する主成分負荷（第 3 主成分まで）

変数名	PC1	PC2	PC3
希望の勤務地で働ける	<u>0.420</u>	0.211	0.299
仕事内容が魅力的	<u>0.551</u>	0.118	-0.216
労働環境がいい	-0.053	<u>-0.344</u>	<u>-0.637</u>
休日・休暇が多い	<u>-0.340</u>	<u>0.541</u>	<u>0.310</u>
福利厚生が整っている	-0.194	<u>-0.698</u>	<u>0.525</u>
将来性がある	0.092	-0.012	-0.045
社会への貢献度が高い	0.083	-0.032	0.004
給料が高い	<u>-0.591</u>	0.203	-0.289
大企業や有名な会社	0.001	0.006	0.007
親や先生の勧め	0.004	0.003	0.007
公共交通機関をはじめ生活の利便性が高い	0.010	-0.008	0.016
在宅勤務やテレワークなど自由な働き	0.010	0.010	0.022
累積寄与度	0.197	0.375	0.523

※主成分負荷の絶対値が 0.3 を越えたものについて下線を付している

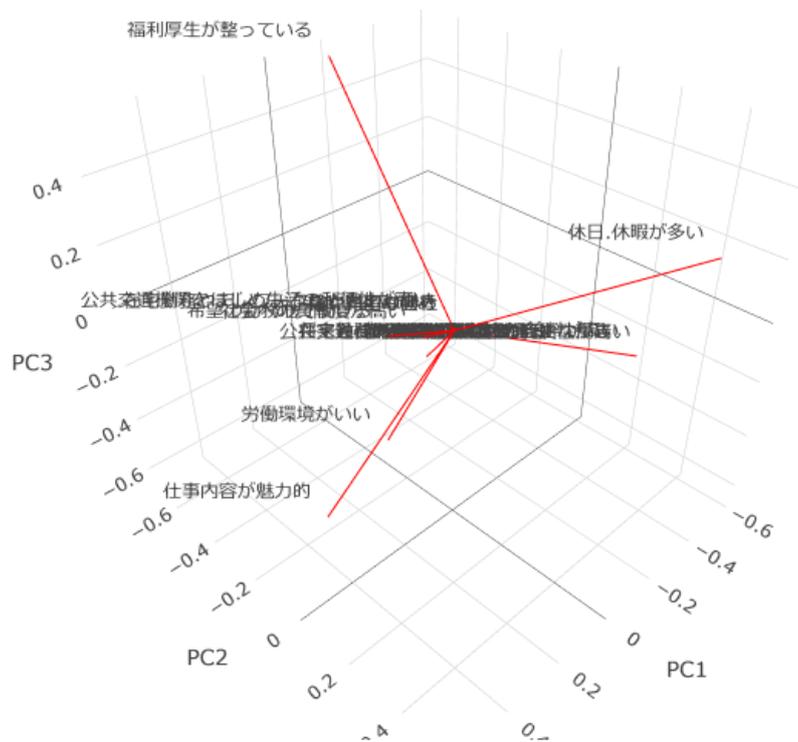


図 3：就職先の選択で重視する要素に関するバイプロット

主成分分析の結果から、第 1 主成分は「仕事内容の魅力軸」として解釈される。この軸は、仕事内容が魅力的であることや希望する勤務地で働くことが強く正の負荷を持つ一方で、給料の高さや休日・休暇の多さが負の負荷を示している。したがって、この軸は仕事内容の魅力や勤務地の希望といった内的な満足感を重視する傾向を反映していると考えられる。

第 2 主成分は「福利厚生軸」として解釈される。この軸では、休日・休暇の多さが正の負荷を示し、福利厚生の整備状況や労働環境の良さが負の負荷を示している。このことから、福利厚生の充実や労働環境の整備が重視される一方で、それが休日・休暇の充実とトレードオフの関係にある可能性を示唆している。

第 3 主成分は「柔軟な働き方軸」として解釈される。この軸では、福利厚生の整備や休日・休暇の多さ、希望する勤務地で働くことが正の負荷を示す一方で、労働環境の良さが負の負荷を示している。この結果は、働き方の柔軟性や福利厚生といった物理的条件を重視する層が、労働環境そのものの質を相対的に軽視する可能性を示している。

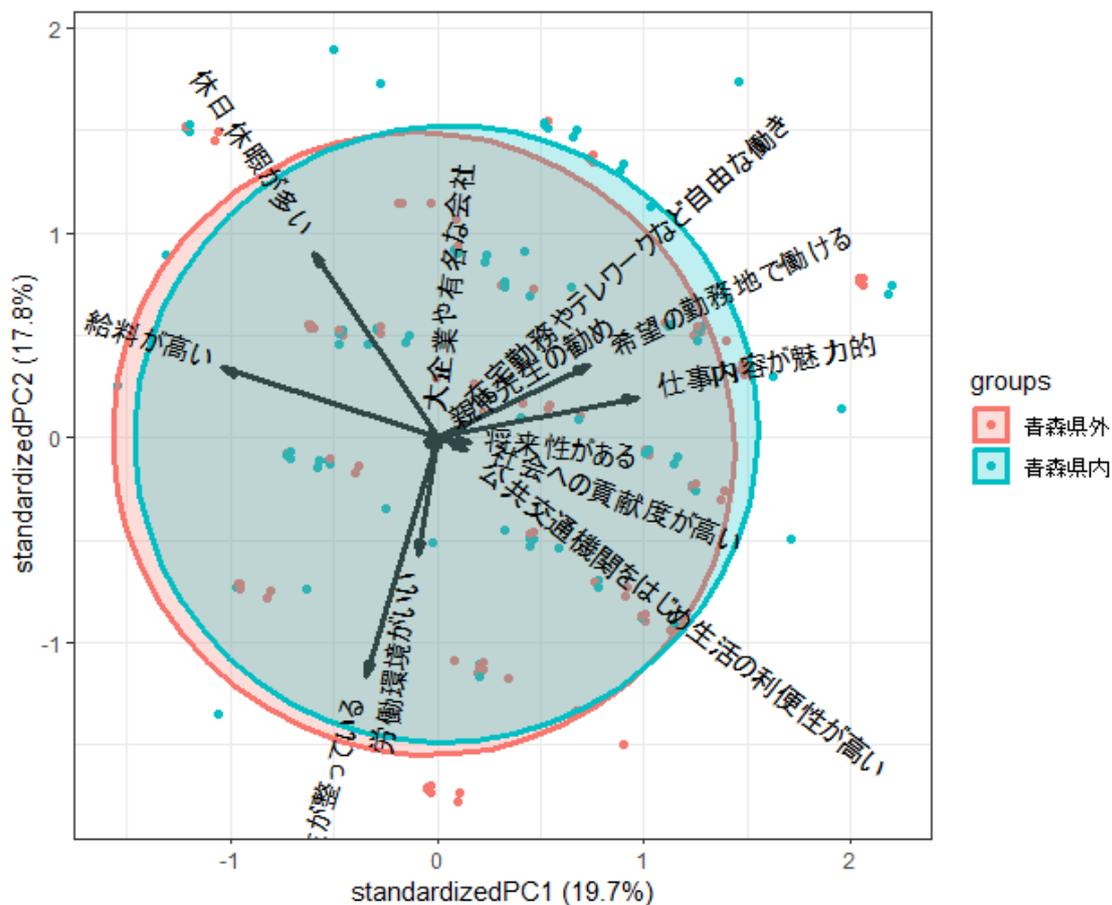


図 4：希望就職地と就職先の選択で重視する要素

図 4 は、就職先を選ぶ際に重要だと考える要素についての主成分分析（第 1 主成分および第 2 主成分）のバイプロットに、希望する就職先が青森県内か県外かを重ねたものである。青森県内企業を希望する回答者の分布は青色、県外企業を希望する回答者の分布は赤色で示されている。この図から、各グループの分布の特徴や、評価軸の違いを以下のように読み取ることができる。

第 1 主成分は 19.7%の分散を説明しており、「仕事内容の魅力軸」として解釈される。この軸上では、青森県内企業を希望するグループが全体的に正の方向に分布しており、仕事内容の魅力や勤務地の希望を重視していることが示唆される。一方、県外企業を希望するグループは負の方向に分布しており、給与や休日・休暇といった経済的な条件を重視する傾向が見られる。

第2主成分は17.8%の分散を説明しており、「福利厚生軸」として解釈されている。この軸上では、県内企業を希望するグループが「地域密着」や「生活の利便性が高い」といった条件にやや関心を持つ一方で、県外企業を希望するグループは「福利厚生」や「休日・休暇」といった条件に関心が高いことが示唆される。

図全体を通して、青森県内企業を希望する回答者は「仕事内容の魅力」や「地域密着」といった要素を重視する傾向があるのに対し、県外企業を希望する回答者は「給料の高さ」や「休日・休暇の多さ」、さらには「福利厚生の充実」といった具体的な経済的・物理的条件を重視していることが明らかになった。

表4：各グループの重心の位置

	PC1	PC2	PC3
県内希望	0.026	0.010	0.003
県外希望	-0.038	-0.016	-0.005

表4は、第3主成分までで青森県内企業を希望するグループと県外企業を希望するグループの重心位置を示したものである。

まず、第1主成分では、青森県内企業を希望するグループが正の値を示しており、仕事内容や勤務地の希望といった要素をやや強く重視していることが示唆される。一方、県外企業を希望するグループは負の値を示しており、給与や休暇といった経済的条件にやや重点を置いていることが分かる。

次に、第2主成分では、青森県内企業を希望するグループがわずかに正の値を示しており、地域密着性や生活の利便性に対する関心が一定程度存在することが読み取れる。一方、県外企業を希望するグループは負の値を示しており、これらの要素への関心は比較的低い傾向にある。

最後に、第3主成分では、両グループの値は小さいものの、青森県内企業を希望するグループが正の値、県外企業を希望するグループが負の値を示している。この結果は、柔軟な働き方や物理的条件に対するわずかな重視の違いを反映している可能性がある。

全体として、青森県内企業を希望するグループは「仕事内容の魅力」や「地域密着性」をやや重視する一方で、県外企業を希望するグループは「経済的条件」や「福利厚生」といった要素にやや重点を置いていることが示唆される。

3-3. 県内企業就職希望者の重視条件

つづいて、県内就職希望者が就職先を選ぶ際に重視する要素について主成分分析を行った。主成分負荷の詳細については、第3主成分までを表5に示している。また、主成分分析の結果を視覚的に把握するためのバイプロットを図5に示している。

表 5：県内希望就職者の希望理由

変数名	PC1	PC2	PC3
自分の能力が活かそうだから	0.067	0.292	0.175
希望する企業があるから	0.036	0.105	0.114
知人が多いから	0.293	0.114	0.63
親や家族を支えたいから	<u>0.484</u>	<u>0.498</u>	0.166
出身地域が好きだから	<u>0.475</u>	<u>0.364</u>	<u>-0.622</u>
就職後の生活が精神的に楽だと思ふから	<u>0.457</u>	<u>-0.479</u>	0.173
希望する給与や待遇が期待できるから	0.026	0.015	0.056
物価が安く、経済的な負担が少ないから	0.162	-0.182	0.161
親と家族の勧めで	0.085	0.001	0.066
奨学金を借りているから	0.069	0.003	0.153
住み慣れていて便利だから	<u>0.449</u>	<u>-0.497</u>	-0.241
累積寄与度	0.208	0.342	0.457

※主成分負荷の絶対値が 0.3 を越えたものについて下線を付している

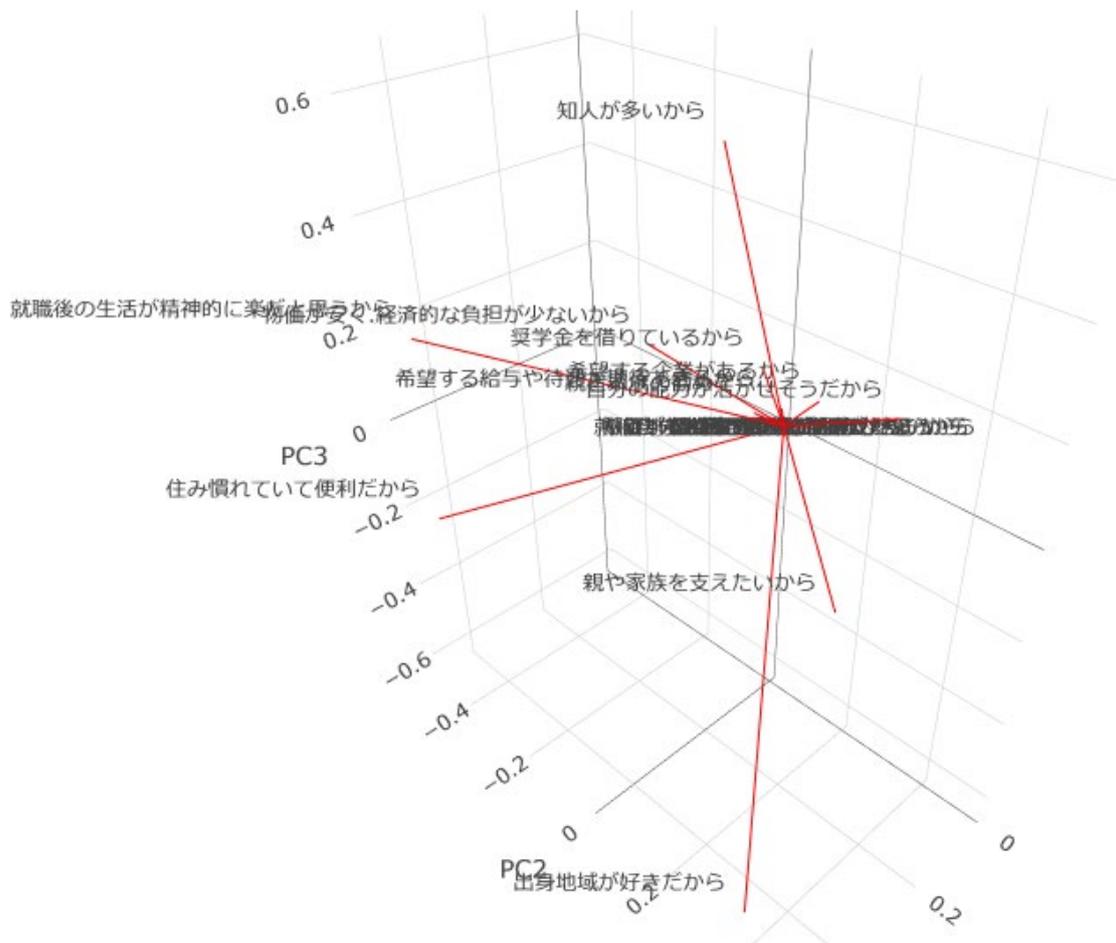


図 5：県内就職希望者の希望理由に関するパイプロット

この主成分分析の結果から、県内就職希望者が県内を希望する理由に関連する主成分を抽出し、それぞれの軸を以下のように解釈することができる。

第1主成分は「地域愛と家族支援軸」として解釈される。この軸では、「親や家族を支えたいから」、「出身地域が好きだから」、「住み慣れていて便利だから」が強い正の負荷を示している。このことから、回答者の地域に対する愛着や家族を支える意識が、県内就職を希望する理由の主要な要因となっていることが示唆される。

第2主成分は「精神的快適さと家族志向軸」として解釈される。この軸では、「親や家族を支えたいから」、「出身地域が好きだから」が正の負荷を持つ一方で、「就職後の生活が精神的に楽だと思えるから」や「住み慣れていて便利だから」が負の負荷を示している。この結果は、家族志向が強い回答者は精神的快適さを重視する一方で、便利さや生活の楽しさと家族支援が必ずしも一致しない可能性を示唆している。

第3主成分は「人間関係と地域価値軸」として解釈される。この軸では、「知人が多いから」が強い正の負荷を持ち、「出身地域が好きだから」が強い負の負荷を示している。この

援を重視していることが示唆される。一方、「転職」を想定しているグループは負の方向に分布しており、地域や家族への依存度が低いことが読み取れる。

第2主成分は13.4%の分散を説明しており、「精神的快適さと家族志向軸」として解釈される。この軸上では、「結婚」や「子育て」を想定しているグループが正の方向に分布し、精神的快適さや便利さを重視していることが示される。一方で、「定年退職」を想定しているグループは負の方向に分布しており、便利さや快適さよりも別の要素を重視している可能性がある。

図全体を通じて、「親などの介護」や「結婚」「子育て」を想定しているグループは、家族や地域とのつながりを重視する傾向が強いことがうかがえる。一方で、「転職」や「定年退職」を想定しているグループは、地域や家族に対する依存度が低く、他の要因を優先している可能性が示唆される。

表6：各グループの重心

	PC1	PC2	PC3
結婚	-0.040	-0.004	0.020
子育て	0.015	0.027	0.013
親などの介護	0.006	0.005	-0.058
転職	0.102	-0.015	-0.023
定年退職	-0.026	-0.027	-0.008
想定していない	0.004	0.004	0.005

表6は、主成分分析に基づき、各グループ（「結婚」「子育て」「親などの介護」「転職」「定年退職」「想定していない」）の重心位置を第3主成分まで示したものである。この重心位置から、各グループがどのような評価基準を持っているかが明らかになる。

第1主成分では、「転職」が最も正の値を示しており、地域や家族支援への依存度が低い一方で、職務に関連する要素を重視する傾向が示唆される。一方で、「結婚」は負の値を示しており、家族や地域とのつながりを重視している可能性が高い。

第2主成分では、「子育て」が最も正の値を示しており、精神的快適さや便利さを重視する傾向が見られる。一方、「定年退職」は負の値を示しており、これらの要素への関心が相対的に低いことが読み取れる。

第3主成分では、「親などの介護」が負の値を示しており、地域価値や家族支援を重視する一方で、他のグループに比べて柔軟な働き方や便利さへの関心が低い可能性がある。「結婚」や「子育て」、「想定していない」グループは全体的に第3主成分における値が小さく、特定の方向性を持たないと考えられる。

全体として、「結婚」や「子育て」を想定しているグループは、家族や地域とのつながり

を一定程度重視する傾向があるのに対し、「転職」や「定年退職」を想定しているグループは、地域や家族支援に対する関心が低く、その他の要素を優先している可能性が示唆される。

3-4. 県外就職希望者の重視要件

最後に、県外就職希望者が就職先を選ぶ際に重視する要素について主成分分析を行った。主成分負荷の詳細については、第3主成分までを表7に示している。また、主成分分析の結果を視覚的に把握するためのバイプロットを図7に示している。

表 7：県外就職希望者の希望理由

変数名	PC1	PC2	PC3
自分の能力が活かそうだから	0.055	0.298	-0.118
希望する企業があるから	-0.096	<u>0.755</u>	-0.215
知人が多いから	-0.012	-0.018	0.060
親や家族を支えたいから	-0.026	0.042	-0.008
その地域が好きだから	-0.153	-0.113	0.041
就職後の生活が精神的に楽だと思ふから	-0.196	0.020	-0.044
希望する給与や待遇が期待できるから	<u>-0.578</u>	<u>0.374</u>	-0.063
出身地域と別の場所で生活してみたいから	<u>-0.465</u>	<u>0.414</u>	<u>-0.723</u>
親と家族の勧めで	-0.004	0.001	-0.226
奨学金を借りているから	-0.031	0.049	0.012
都会の方が便利だから	<u>-0.611</u>	-0.113	<u>0.636</u>
累積寄与度	0.197	0.373	0.512

※主成分負荷の絶対値が0.3を越えたものについて下線を付している

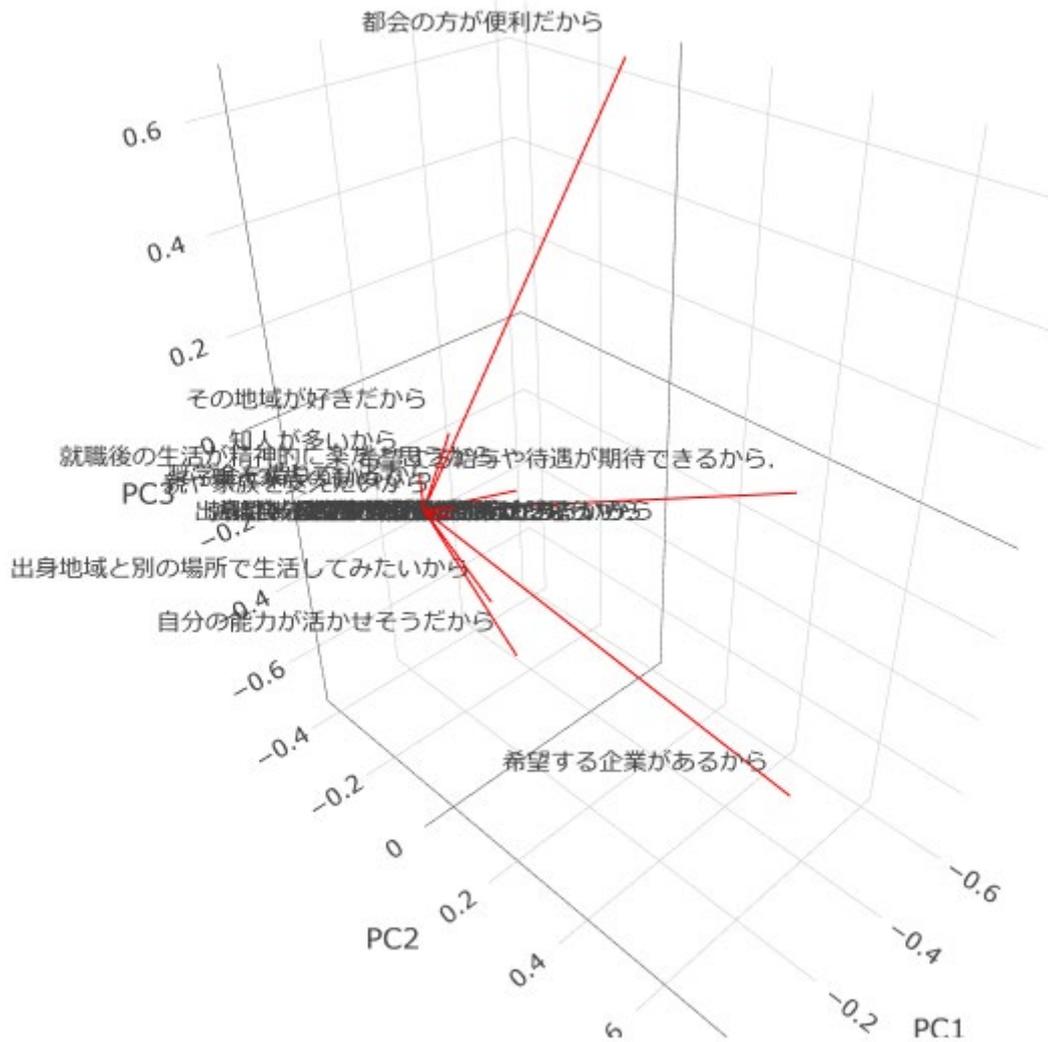


図 7：県外就職希望者の希望理由に関するパイプロット

この主成分分析の結果から、県外就職希望者が県外を希望する理由に関連する主成分軸を以下のように解釈することができる。

第1主成分は「経済的・都市志向軸」として解釈される。この軸では、「希望する給与や待遇が期待できるから」、「出身地域と別の場所で生活してみたいから」、「都会の方が便利だから」が強い負の負荷を示している。このことから、県外就職希望者にとって、経済的な条件や都市の利便性が、就職先選択において重要な基準となっていることが示唆される。

第2主成分は「企業志向・挑戦軸」として解釈される。この軸では、「希望する企業があるから」、「希望する給与や待遇が期待できるから」、「出身地域と別の場所で生活してみたいから」が強い正の負荷を示している。この結果は、特定の企業への就職を目指すことや、その企業が提供する条件を重視している傾向、新しい環境への挑戦意識を反映している。

第3主成分は「生活環境・安定志向軸」として解釈される。この軸では、「都会の方が便利だから」、「出身地域と別の場所で生活してみたいから」が対照的な負荷を示している。これにより、都会の利便性を求める層と、新しい環境での生活に対する抵抗感がある層という、異なる志向性が存在することが分かる。

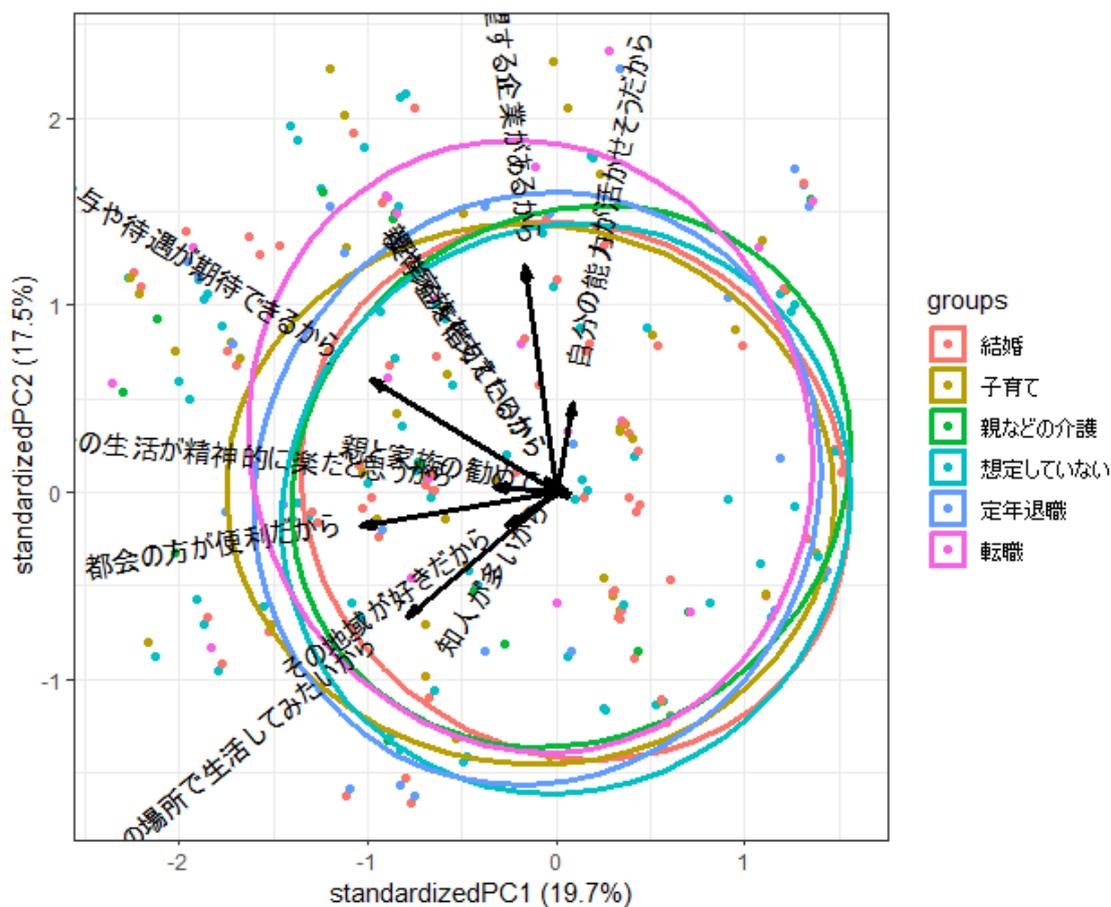


図 8：県外就職希望理由と想定ライフステージ

図 8 は、県外就職希望者が就職先を選ぶ際にどのライフステージを想定しているかを主成分分析のバイプロットに重ね合わせたものである。

第 1 主成分は 19.7%の分散を説明しており、経済的条件や都市志向が強い負の負荷を持つ。この軸上では、「転職」を想定しているグループが正の方向に分布し、経済的条件への依存が比較的低い一方で、「結婚」や「定年退職」を想定しているグループが負の方向に分

布し、給与や生活費といった経済的条件を重視している傾向が見られる。

第2主成分は17.5%の分散を説明しており、「企業志向・挑戦軸」として解釈された。この軸上では、「子育て」や「結婚」を想定しているグループが正の方向に分布し、具体的な企業志向や経済的な基盤の重要性を示している。一方で、「定年退職」を想定しているグループは負の方向に分布し、これらの要素に対する関心が低いことが読み取れる。

図全体を通じて、「転職」や「想定していない」グループは特定の要素に強く依存しておらず、ライフステージに関係なく柔軟な価値観を持っている可能性が示唆される。一方、「結婚」や「子育て」「親などの介護」を想定しているグループは、特定の条件（経済的条件や企業志向）をより強く重視していることが明らかになった。

表 8：各グループの重心

	PC1	PC2	PC3
結婚	0.007	0.028	-0.051
子育て	-0.007	-0.014	-0.021
親などの介護	0.063	0.035	0.083
転職	0.004	-0.008	0.008
定年退職	-0.048	-0.022	0.053
想定していない	0.003	-0.008	-0.003

表 8 に、第 3 主成分までで各ライフステージを想定したグループの重心の位置を示す。これに基づき、各グループがどのような評価基準を重視しているかを以下に解釈する。

第1主成分では、「親などの介護」を想定しているグループが正の値を示しており、経済的条件や生活基盤を比較的重視していることが示唆される。一方、「定年退職」を想定しているグループは負の値を示しており、経済的条件への依存がやや低い可能性がある。

第2主成分では、「結婚」を想定しているグループが正の値を示しており、特定の企業志向や生活基盤への関心が強いことが読み取れる。一方、「子育て」や「定年退職」を想定しているグループは負の値を示しており、これらの要素への関心が相対的に低い傾向が見られる。

第3主成分では、「親などの介護」を想定しているグループが最も正の値を示しており、生活基盤や地域とのつながりを重視していることが示唆される。「結婚」や「定年退職」を想定しているグループも正の値を示しているが、その強度はやや低い。一方、「子育て」や「想定していない」グループは負の値を示しており、柔軟性や具体的な条件への依存が比較的低い可能性がある。

全体として、「親などの介護」や「結婚」を想定しているグループは、経済的条件や生活基盤、地域とのつながりを一定程度重視していることが分かる。一方で、「転職」や「想定

していない」グループは、特定の要素に対する依存度が低く、より柔軟な価値観を持っている可能性が示唆される。

県内就職希望者と県外就職希望者の主成分負荷およびグループ重心の違いを比較することで、両者の特徴的な傾向が明らかになった。まず、主成分負荷の違いから見ると、県内就職希望者は「親や家族を支えたいから」「出身地域が好きだから」「住み慣れていて便利だから」といった要因が第1主成分（地域・家族志向軸）に強い正の負荷を示しているのに対し、県外就職希望者ではこれらの要因の負荷が低いか、負の値を示している。このことから、県内就職希望者は地域や家族とのつながりを重視する傾向が強いことがわかる。

一方で、県外就職希望者では、「希望する企業があるから」や「希望する給与や待遇が期待できるから」といった経済的要因や企業志向が第2主成分に強く寄与しており、これが県内就職希望者との大きな違いとなっている。具体的には、「希望する企業があるから」が第2主成分に対して0.755の正の負荷を示しており、県外就職希望者が企業選択において特定の企業や条件を重視していることを反映している。

さらに、グループ重心の違いを考慮すると、県内就職希望者は全体的に地域や家族志向が重視される一方で、「転職」や「想定していない」といったライフステージを持つグループは第1主成分で比較的正の値を示しており、地域や家族への依存度がやや低いことが示唆される。一方、県外就職希望者では、「親などの介護」や「定年退職」といった項目が第3主成分で正の値を示しており、県外就職希望者の中には、将来的なライフイベント（介護・定年退職）を見据え、都会で安定した労働環境や生活基盤の確保を重視する層がいることが示唆される。

また、第3主成分の負荷からは、県内就職希望者が「知人が多いから」や「住み慣れていて便利だから」といった要素を重視する傾向が強いことが見て取れるのに対し、県外就職希望者は「都会の方が便利だから」が0.636の正の負荷を持ち、物理的な利便性をより重視していることが示されている。

総じて、県内就職希望者は地域や家族とのつながりを中心とした価値観を持ち、地域コミュニティや安定性を重視している一方、県外就職希望者は特定企業への志向や経済的条件、利便性・都市での生活といった要素をより強く重視していることが明らかとなった。これらの結果は、県外就職希望者を県内に引き留めるための政策的示唆を与えるものであり、特に給与や待遇といった経済的条件の改善、ならびに労働環境の整備が求められると言える。

4. まとめ

本調査では、青森県内出身学生を対象に、企業イメージおよび就職先選択理由に関する分析を主成分分析を用いて行い、県内企業と県外企業を希望するグループの評価基準や特徴を比較した。また、回答者が想定するライフステージが就職先選択に及ぼす影響についても検討した。

分析の結果、以下の点が明らかになった。まず、県内企業のイメージにおいては、「ポジティブな要素（地域密着性や親しみやすさ）」を評価する軸と「ネガティブな要素（労働条件の悪さや将来性の欠如）」を評価する軸が抽出された。県内就職希望者はポジティブな要素を、県外就職希望者はネガティブな要素を強く認識していることが示された。

次に、県内企業および県外企業の選択理由においては、それぞれ異なる評価軸が存在することが確認された。県内企業では、「地域愛と家族支援」を重視する軸が顕著であり、県外企業では「経済的条件」や「企業志向」が重視されていた。また、ライフステージを考慮した分析では、「結婚」や「子育て」を想定している回答者は家族支援や経済的基盤を重視し、「転職」や「定年退職」を想定している回答者は柔軟な価値観を持っている傾向が示唆された。これらの結果から、就職先選択における評価基準が多様であり、地域や企業が提供する価値が就職希望者の背景や想定するライフステージによって異なることが明確になった。

本調査の分析から、就職先選択における評価基準は、地域、家族、経済的条件、企業志向、ライフステージといった多様な要因に依存していることが示唆された。特に、県内就職希望者は地域密着性や家族支援を重要視し、県外就職希望者は経済的条件や具体的な企業志向を優先する傾向が顕著であった。また、ライフステージの違いが評価基準に与える影響も大きく、家族支援を重視するライフステージ（結婚や子育て）と、柔軟な価値観を持つライフステージ（転職や想定していない）で異なる傾向が見られた。

これらの知見は、地域や企業が就職希望者のニーズに応じた施策を立案する際に有用な示唆を与えるものである。例えば、地域では、家族支援や地域密着型の雇用環境をさらに強化することが、県内就職希望者の増加に寄与する可能性がある。一方、企業では、給与や福利厚生の改善、明確なキャリアパスの提示といった具体的な経済的条件の提供が、県外就職希望者のニーズに応える鍵となると考えられる。

本調査は、就職先選択における価値観の多様性を明らかにする一助となったが、さらに詳細な分析や地域特性に基づいた調査の拡充が、より包括的な理解につながると期待される。

参考資料

本文では、主成分分析による結果を可視化するため、データを2次元ないし3次元に圧縮して分析を行った。この手法により、回答者の評価軸や特徴を簡潔に示し、直感的に理解しやすい結果を提供することを目的とした。一方で、通常の主成分分析では、累積寄与度がある程度大きくなるまで主成分軸を作成し、データ全体の分散をより多く説明することが推奨される。

本補足資料では、累積寄与度が0.7(70%)を超えるまで主成分軸を拡張し、それぞれの主成分の負荷や解釈についてより詳細に分析を行った結果を示す。この追加的な分析により、本文で示した評価軸に加え、回答者が持つ多次元的な価値観や認識のさらなる側面が明らかになる可能性がある。本資料では、累積寄与度が増加するに伴い、各主成分が持つ特徴をどのように解釈できるかについても検討し、補足的な知見を提供する。

表 9：青森県内企業イメージの主成分

変数名	PC1	PC2	PC3	PC4	PC5
小規模・零細な企業が多く、大企業が少ない	-0.540	0.009	-0.750	0.208	-0.136
地域に密着した仕事に携われる	-0.145	0.772	0.005	-0.546	0.128
アットホームで親しみやすい雰囲気がある	0.058	0.493	0.274	0.753	-0.117
労働条件（賃金や福利厚生など）が悪い	-0.536	-0.150	0.489	-0.204	-0.582
将来性がなく、時代に合った仕事が少ない	-0.354	-0.196	0.275	0.137	0.355
研究開発や企画部門が少ない	-0.247	0.012	0.078	0.041	0.345
下請けが多い	-0.308	-0.016	0.092	0.031	0.544
技術力・専門性がある	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
経営が不安定で計画性がない	-0.180	-0.068	0.142	0.055	0.187
仕事にやりがいや誇りを持てる	-0.011	0.123	0.082	0.046	0.041
女性労働者が多い	-0.016	0.032	0.022	0.012	0.002
ワークライフバランスを実践できる	-0.001	0.113	0.052	0.062	0.019
特にイメージはない	0.288	-0.255	0.047	-0.140	0.184
累積寄与度	0.243	0.411	0.523	0.624	0.713

まず、県内企業に対するイメージについては、第5主成分まで抽出した。累積寄与度は0.713(71.3%)に達しており、データ全体の分散の7割以上を説明できることから、この範囲での分析を適切と判断した。各主成分の主成分負荷は表9に示されている。以下では、それぞれの主成分軸の解釈を示す。

第1主成分は「企業構造的課題軸」として解釈される。この軸には、「小規模・零細な企業が多く、大企業が少ない」、「労働条件が悪い」、「将来性がない」といった変数が大きく寄与している。この軸は、企業の規模や労働環境、将来性に関連する否定的な要素を評価する

基準を反映していると考えられる。

第2主成分は「地域密着性と親しみやすさ軸」として解釈される。この軸には、「地域に密着した仕事に携われる」や「アットホームで親しみやすい雰囲気がある」が強い正の負荷を示している。この軸は、地域性や職場の雰囲気といったポジティブな要素を評価する基準として機能している。

第3主成分は「労働環境評価軸」として解釈される。この軸には、「労働条件が悪い」や「将来性がない」、「小規模な企業が多い」といった変数が寄与している。この軸は、企業の労働環境や安定性に対する評価基準を示している。

第4主成分は「職場の親近感と独立性軸」として解釈される。この軸には、「アットホームで親しみやすい雰囲気がある」や「地域に密着した仕事に携われる」が寄与しており、職場環境における親しみやすさと地域への依存度のバランスを評価する基準を示していると考えられる。

第5主成分は「業務の専門性と役割評価軸」として解釈される。この軸には、「下請けが多い」や「研究開発や企画部門が少ない」が寄与しており、業務内容や専門性に対する評価を反映している。

表 10：就職先を選ぶ際に重視する項目

変数名	PC1	PC2	PC3	PC4	PC5
希望の勤務地で働ける	0.420	0.211	0.299	-0.069	0.712
仕事内容が魅力的	0.551	0.118	-0.216	0.269	-0.536
労働環境がいい	-0.053	-0.344	-0.637	-0.574	0.142
休日・休暇が多い	-0.340	0.541	0.310	-0.509	-0.336
福利厚生が整っている	-0.194	-0.698	0.525	0.068	-0.14
将来性がある	0.092	-0.012	-0.045	0.126	-0.060
社会への貢献度が高い	0.083	-0.032	0.004	0.070	-0.029
給料が高い	-0.591	0.203	-0.289	0.554	0.22
大企業や有名な会社	0.001	0.006	0.007	0.018	0.004
親や先生の勧め	0.004	0.003	0.007	0.003	0.004
公共交通機関をはじめ生活の利便性が高い	0.010	-0.008	0.016	0.024	0.027
在宅勤務やテレワークなど自由な働き	0.010	0.010	0.022	0.013	-0.010
累積寄与度	0.197	0.375	0.523	0.671	0.793

次に、就職先を選択する際に重要だと考えられる要素を対象に主成分分析を行い、第5主成分まで抽出した。結果は表10に示されている。累積寄与度は0.793(79.3%)に達しており、全体の分散の8割近くを説明できることから、この範囲での分析を適切と判断した。それぞれの主成分軸について以下に解釈を示す。

第1主成分は「仕事内容の魅力と勤務地重視軸」として解釈される。この軸には、「仕事内容が魅力的」、「希望の勤務地で働ける」が強く寄与している一方で、「給料が高い」が負の負荷を示している。この軸は、仕事そのものの魅力や勤務地の希望を優先し、経済的な条件を二の次とする価値観を反映していると考えられる。

第2主成分は「福利厚生と労働環境軸」として解釈される。この軸には、「福利厚生が整っている」や「休日・休暇が多い」が寄与しており、職場環境の物理的な条件や福利厚生の充実が重視されている。この軸は、働きやすさや職場環境の整備に対する評価を反映している。

第3主成分は「労働環境の特性軸」として解釈される。この軸には、「労働環境がいい」や「福利厚生が整っている」が寄与しており、労働環境そのものの特性や条件が評価される基準を反映している。

第4主成分は「休暇と経済条件のバランス軸」として解釈される。この軸には、「給料が高い」や「休日・休暇が多い」が寄与しており、経済的条件と職場の休暇制度のバランスが評価されている。この軸は、仕事と生活の両立におけるトレードオフを示していると考えられる。

第5主成分は「柔軟性と利便性軸」として解釈される。この軸には、「希望の勤務地で働ける」や「公共交通機関をはじめ生活の利便性が高い」が寄与しており、勤務地の柔軟性や生活環境の利便性を評価する基準を示している。

表 11：県内就職希望理由

変数名	PC1	PC2	PC3	PC4	PC5	PC6
自分の能力が活かせそうだから	0.067	0.292	0.175	-0.106	-0.425	0.562
希望する企業があるから	0.036	0.105	0.114	-0.023	-0.306	0.218
知人が多いから	0.293	0.114	0.63	-0.633	0.157	-0.270
親や家族を支えたいから	0.484	0.498	0.166	0.548	0.413	0.044
出身地域が好きだから	0.475	0.364	-0.622	-0.313	-0.292	-0.205
就職後の生活が精神的に楽だと思うから	0.457	-0.479	0.173	0.339	-0.455	-0.380
希望する給与や待遇が期待できるから	0.026	0.015	0.056	0.026	-0.098	0.083
物価が安く、経済的な負担が少ないから	0.162	-0.182	0.161	-0.020	-0.150	0.288
親と家族の勧めで	0.085	0.001	0.066	0.118	-0.068	0.061
奨学金を借りているから	0.069	0.003	0.153	0.125	-0.179	0.240
住み慣れていて便利だから	0.449	-0.497	-0.241	-0.210	0.412	0.473
累積寄与度	0.208	0.342	0.457	0.560	0.656	0.741

表 11 には、県内就職希望者の理由の主成分負荷が示されている。県内就職希望者が県内

就職を希望する理由について、累積寄与度が 0.741 に達する第 6 主成分までを解釈した結果、それぞれの主成分がどのような評価軸を示しているかを以下に説明する。

第 1 主成分は、「親や家族を支えたいから」や「出身地域が好きだから」、「住み慣れていて便利だから」といった変数が強い正の負荷を示している。これらの結果は、地域や家族とのつながりを重視する志向を反映していると解釈できる。特に、地域への愛着や家族を支える意識が、県内就職希望者の動機の中核をなしていることが示唆される。

第 2 主成分は、「親や家族を支えたいから」や「出身地域が好きだから」が正の負荷を示す一方で、「就職後の生活が精神的に楽だと思ふから」や「住み慣れていて便利だから」が負の負荷を示している。この結果は、家族志向が強い回答者が精神的快適さを重視する一方で、利便性や生活の快適さとのトレードオフがあることを示唆している。この軸は、精神的快適さと社会的安定のバランスを評価する基準として位置付けられる。

第 3 主成分は、「知人が多いから」が正の負荷を示し、「出身地域が好きだから」が負の負荷を示している。この結果から、知人が多いことで形成される人間関係の価値が、地域そのものへの愛着とは異なる評価基準として機能していることがわかる。この主成分は、人間関係と地域環境の重要性を区別する指標として解釈できる。

第 4 主成分は、「親や家族を支えたいから」が強い正の負荷を示し、家族とのつながりを強化する意識が就職理由として重要であることが示されている。この軸は、家族との関係を重視する志向を反映している。

第 5 主成分は、「住み慣れていて便利だから」や「親や家族を支えたいから」が正の負荷を示し、「就職後の生活が精神的に楽だと思ふから」が負の負荷を示している。この結果は、効率的な生活条件の重要性を評価する軸として位置付けられる。

最後に、第 6 主成分は、「自分の能力が活かそうだから」や「希望する企業があるから」が正の負荷を示している。この結果は、自己実現や仕事を通じた成長を重視する評価軸を反映している。

以上のように、県内就職希望者の主成分分析からは、地域への愛着、家族支援、生活条件の効率性、さらには自己実現といった多様な動機が抽出された。この結果は、地域における就職促進のための政策立案において、地域志向や家族志向を強調しつつ、効率的な生活環境や自己実現の機会を提供することの重要性を示唆するものである。

表 12：県外就職希望者の理由

変数名	PC1	PC2	PC3	PC4	PC5
自分の能力が活かそうだから	0.055	0.298	-0.118	0.302	0.162
希望する企業があるから	-0.096	0.755	-0.215	0.436	-0.139
知人が多いから	-0.012	-0.018	0.060	0.041	0.085
親や家族を支えたいから	-0.026	0.042	-0.008	0.004	0.064
その地域が好きだから	-0.153	-0.113	0.041	0.267	0.888
就職後の生活が精神的に楽だと思ふから	-0.196	0.020	-0.044	-0.013	0.199
希望する給与や待遇が期待できるから	-0.578	0.374	-0.063	-0.678	0.140
出身地域と別の場所で生活してみたいから	-0.465	0.414	-0.723	0.222	-0.175
親と家族の勧めで	-0.004	0.001	-0.226	-0.007	0.013
奨学金を借りているから	-0.031	0.049	0.012	-0.024	-0.033
都会の方が便利だから	-0.611	-0.113	0.636	0.368	-0.252
累積寄与度	0.197	0.373	0.512	0.623	0.731

最後に、県外就職希望者の理由を表 12 に示す。県外就職希望者が県外就職を希望する理由に関する主成分分析の結果をもとに、累積寄与度が 0.731 に達する第 5 主成分までを解釈した結果、それぞれの主成分がどのような評価軸を示しているかを以下に説明する。

第 1 主成分は、「希望する給与や待遇が期待できるから」や「都会の方が便利だから」、「出身地域と別の場所で生活してみたいから」といった変数が強い負の負荷を示している。この結果は、県外就職希望者が経済的条件や都市の利便性を重視していることを反映している。この軸は、経済的安定性と都市環境の魅力に関する評価基準として位置付けられる。

第 2 主成分は、「希望する企業があるから」や「出身地域と別の場所で生活してみたいから」、「希望する給与や待遇が期待できるから」が強い正の負荷を示している。この結果は、特定の企業やキャリアの魅力重視の志向と、新しい環境での生活への挑戦意識を反映している。この軸は、企業志向と挑戦的なキャリア選択を評価する基準であると解釈できる。

第 3 主成分は、「都会の方が便利だから」が強い正の負荷を示し、「出身地域と別の場所で生活してみたいから」が負の負荷を示している。この結果から、都市の利便性を求める層と、新しい環境への適応に慎重な層との間で評価基準が分かれることが示唆される。この主成分は、生活環境の利便性と新しい環境への適応志向のバランスを評価する指標として解釈される。

第 4 主成分は、「希望する給与や待遇が期待できるから」が負の負荷を示している一方で、「その地域が好きだから」が正の負荷を示している。この結果は、地域への愛着と経済的要因との間でトレードオフが存在することを示唆している。この軸は、地域志向と経済条件の優先順位を評価する基準といえる。

第5主成分は、「その地域が好きだから」が最も強い正の負荷を示している。この結果は、地域そのものへの愛着が一部の県外就職希望者にとって重要な動機であることを示している。この主成分は、地域への感情的なつながりを評価する基準として解釈できる。

以上のように、県外就職希望者の主成分分析からは、経済的条件、特定の企業志向、生活基盤、地域への愛着など、複数の評価軸が明らかになった。この結果は、県外就職希望者の多様な動機を理解し、地域の魅力向上や就職支援策の立案において示唆を与えるものである。

回答者の集計表

N=4935

計画サンプル 13975

回収率 4935/13957=35.4%

F1	性別	N	%
1	男性	2088	42%
2	女性	2826	58%
	全体	4914	100%

F2	地域別	N	%
1	中南地域	3350	68%
2	東青地域	643	13%
3	三八上北地域	942	19%
	全体	4935	100%

F3	学部・学科	N	%
1	人文学部(文学部、歴史、文学、語学、人類学など)	535	11%
2	社会科学部(法学、社会学、経済学、経営学など)	444	9%
3	教育学部	794	16%
4	工学部・理学部	980	20%
5	農学部	630	13%
6	医学部	507	10%
7	保健学部	960	20%
8	薬学部	42	1%
9	その他の学部	18	0%
	全体	4910	100%

F4	学籍番号	N	%
	1		
	2		
	3		
	全体		

F5	学年(八戸工業高等専門学校生は4、5年生のみ)	N	%
	1 1年	1770	36%
	2 2年	1290	26%
	3 3年	925	19%
	4 4年	900	18%
	5 5年	42	1%
	6 6年	8	0%
	全体	4935	100%

Q21	在籍している大学を選んだ理由を教えてください。あてはまるものをすべてお選びください。	N	%
	1 教育内容が良かったから	1123	23%
	2 行きたい学部、学科があったから	3350	68%
	3 教師、友人の勧めがあったから	1066	22%
	4 家族や親戚の勧めがあったから	850	17%
	5 経済的な理由で	1005	20%
	6 共通テスト(センター試験)の結果などから	1671	34%
	全体	4935	100%

Q22	実家の住所についてお知らせください。	N	%
1	北海道	653	13%
2	青森県(青森市・東青地域)	898	18%
3	青森県(弘前市・中南・西北地域)	1276	26%
4	青森県(八戸市・三八・上北・むつ下北)	916	19%
5	岩手県	332	7%
6	秋田県	268	5%
7	宮城県	126	3%
8	山形県	48	1%
9	福島県	34	1%
10	関東・甲信越	212	4%
11	東海・北陸	76	2%
12	近畿	33	1%
13	中国・四国	14	0%
14	九州・沖縄	14	0%
15	外国	35	1%
	全体	4935	100%

Q23	あなたが同居していた、あるいは同居しているご家族の方をすべてお選びください。	N	%
1	父親	4123	84%
2	母親	4710	95%
3	祖父・祖母	1569	32%
4	兄	967	20%
5	姉	998	20%
6	弟	1389	28%
7	妹	1324	27%
8	その他(以下にご記入ください)	155	3%
	全体	4935	100%

Q24	父親の出身地は実家の所在地ですか。	N	%
1	はい	2775	56%
2	いいえ	1804	37%
3	わからない	356	7%
	全体	4935	100%

Q25	母親の出身地は実家の所在地ですか。	N	%
1	はい	2475	50%
2	いいえ	2263	46%
3	わからない	197	4%
	全体	4935	100%

Q26	あなたは現在、大学生活を通じてどのような力(技能・知識)を身につけたいと思いますか。あてはまるものをすべてお選びください。	N	%
1	多元的に問題の本質を見通す力	2203	45%
2	問題を個人およびチームとして解決する	4186	85%
3	自然や社会への洞察を深化させる力	1497	30%
4	専門知識を国際社会や地域社会の問題解決に活用できる応用力	2366	48%
5	高度な学識を活かす力	2023	41%
6	学び続ける力	2492	50%
	全体	4935	100%

Q27	あなたがこれまで受講した地域志向科目(「地域に関する内容を含んだ科目」を指します。例:地域学、〇〇地域を知る、あおもり学、地域文化等)はどのくらいありますか。科目数を教えてください。まだ科目の登録をしていない場合でも、見込みの科目数を教えてください。	N	%
1	0科目	393	14%
2	1～2科目	1794	63%
3	3～5科目	525	19%
4	6～10科目	94	3%
5	11科目以上	21	1%
	全体	2827	100%

Q28	あなたが今年度受講予定の講義・演習・実習全体を通じて、農作業や文化体験、調査・企画など、地域の現場に触れて体験する機会について、どのくらい期待していますか。あてはまるものを1つお選びください	N	%
1	期待していない	2024	41%
2	1～2回程度	2333	47%
3	3～5回程度	414	8%
4	6回以上	164	3%
	全体	4935	100%

Q29	新たに開講してほしい地域志向科目があれば自由に記入してください。	N	%
1			
2			
3			
	全体		

Q30	起業(独立・開業)に興味はありますか。	N	%
1	まったく興味がない	2848	58%
2	やや興味がある	1641	33%
3	興味がある	359	7%
4	するつもりである	87	2%
	全体	4935	100%

Q31	あなたの小学生のときのことについてお聞きします。以下のことを体験したことがありますか。それぞれの項目ごとにあてはまるものをすべてお選びください。	N	%
1	学校行事以外で、野外で炊事をしたりテントに泊まったりしたことがある	2562	52%
2	興味のある仕事について、本やインターネットなどで調べたことがある	2996	61%
3	企業見学や企業訪問をしたことがある	2756	56%
4	4日以上職場体験やインターンシップを体験したことがある	206	4%
5	地域の祭りに参加したことがある	3986	81%
6	地域のイベントに参加したことがある	3581	73%
7	地域のイベントの手伝いやごみ拾いなどに参加したことがある	2885	58%
8	有料の学習塾やピアノ教室、水泳教室などの習い事に通ったことがある	3145	64%
9	体験したことがない	78	2%
	全体	4935	100%

Q32	あなたの中学生のときのことについてお聞きします。以下のことを体験したことがありますか。それぞれの項目ごとにあてはまるものをすべてお選びください。	N	%
1	学校行事以外で、野外で炊事をしたりテントに泊まったりしたことがある	1615	33%
2	興味のある仕事について、本やインターネットなどで調べたことがある	3550	72%
3	企業見学や企業訪問をしたことがある	2643	54%
4	4日以上職場体験やインターンシップを体験したことがある	880	18%
5	地域の祭りに参加したことがある	3377	68%
6	地域のイベントに参加したことがある	2984	60%
7	地域のイベントの手伝いやごみ拾いなどに参加したことがある	2317	47%
8	有料の学習塾やピアノ教室、水泳教室などの習い事に通ったことがある	2329	47%
9	体験したことがない	150	3%
	全体	4935	100%

Q33	あなたの高校生のときのことについてお聞きします。以下のことを体験したことがありますか。それぞれの項目ごとにあてはまるものをすべてお選びください。	N	%
1	学校行事以外で、野外で炊事をしたりテントに泊まったりしたことがある	1056	21%
2	興味のある仕事について、本やインターネットなどで調べたことがある	3739	76%
3	企業見学や企業訪問をしたことがある	1535	31%
4	4日以上職場体験やインターンシップを体験したことがある	432	9%
5	地域の祭りに参加したことがある	2600	53%
6	地域のイベントに参加したことがある	2226	45%
7	地域のイベントの手伝いやごみ拾いなどに参加したことがある	1460	30%
8	有料の学習塾やピアノ教室、水泳教室などの習い事に通ったことがある	1302	26%
9	体験したことがない	971	20%
	全体	4935	100%

Q34	あなたは現在学内や学外のクラブやサークル、部活に所属していますか。	N	%
1	所属している	2755	56%
2	所属していない	2180	44%
	全体	4935	100%

Q35	所属している方にお聞きします。あなたが、サークルや部活に所属した理由は何ですか。あてはまるものをすべてお選びください	N	%
1	交友関係が広がるから	1965	40%
2	友達や恋人ができるから	865	18%
3	先輩・後輩関係を築けるから	1242	25%
4	就職活動に有利だから	568	12%
5	コミュニケーション能力がつくから	1036	21%
6	家族や友人の勧め	218	4%
7	高校までやってきたから	900	18%
8	なんとなく	458	9%
	全体	4935	100%

Q36	あなたは次のようなボランティア活動を行ったことがありますか。あてはまるものをすべてお選びください。	N	%
1	したことがない	1595	32%
2	福祉に関係した活動(高齢者施設や福祉施設など)	915	19%
3	子どもに関係した活動	1319	27%
4	スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動	856	17%
5	まちづくり・生活に関連した活動	1054	21%
6	環境に関連した活動	1380	28%
7	国際協力に関連した活動	195	4%
8	その他(以下にご記入ください)	63	1%
	全体	4935	100%

Q37	あなたはアルバイトをしていますか。	N	%
1	している	3009	61%
2	まだしていないがやりたいと思っている	993	20%
3	探している	477	10%
4	する予定はない	456	9%
	全体	4935	100%

Q38	「青森県(今住んでいる地域)」に対する意識についてお聞きします。あてはまるものを1つだけお選びください。	全体	1	2	3	4	5
			あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	あてはまる
Q19S1	私は地域の一員であると感じる	4935 100%	676 14%	878 18%	950 19%	1295 26%	1136 23%
Q19S2	私はこの地域に愛着を感じる	4935 100%	543 11%	650 13%	781 16%	1561 32%	1400 28%
Q19S3	この地域を離れることは、困難である	4935 100%	1701 34%	1145 23%	964 20%	676 14%	449 9%
Q19S4	これからこの地域とかかわりを持ち続けたいと思う	4935 100%	571 12%	719 15%	1085 22%	1491 30%	1069 22%
Q19S5	この地域は10年後も今と同じくらい賑やかであると思う	4935 100%	1132 23%	1287 26%	1299 26%	747 15%	470 10%

Q39	どこで働くことを希望しますか。	N	%
1	青森県内	1940	39%
2	青森県外	2995	61%
	全体	4935	100%

Q40	青森県内で働きたい理由を教えてください。 あてはまるものをすべてお選びください。	N	%
1	自分の能力が活かそうだから	392	20%
2	希望する企業があるから	286	15%
3	知人が多いから	609	31%
4	親や家族を支えたいから	963	50%
5	出身地域が好きだから	898	46%
6	就職後の生活が精神的に楽だと思うから	718	37%
7	希望する給与や待遇が期待できるから	85	4%
8	物価が安く、経済的な負担が少ないから	346	18%
9	親と家族の勧めで	191	10%
10	奨学金を借りているから	288	15%
11	住み慣れていて便利だから	1177	61%
12	その他(以下にご記入ください)	42	2%
	全体	1940	100%

Q41	青森県外を希望する場合、どこで働くことを希望しますか。あてはまるものを1つお選びください。	N	%
1	北海道	628	21%
2	岩手県	223	7%
3	秋田県	156	5%
4	宮城県	489	16%
5	山形県	37	1%
6	福島県	27	1%
7	関東甲信	1205	40%
8	東海・北陸	90	3%
9	近畿	63	2%
10	中国・四国	13	0%
11	九州・沖縄	23	1%
12	外国	41	1%
	全体	2995	100%

Q42	青森県外で働きたい理由を教えてください。 あてはまるものをすべてお選びください。	N	%
1	自分の能力が活かそうだから	558	19%
2	希望する企業があるから	921	31%
3	知人が多いから	559	19%
4	親や家族を支えたいから	695	23%
5	その地域が好きだから	1227	41%
6	就職後の生活が精神的に楽だと思うから	599	20%
7	希望する給与や待遇が期待できるから	821	27%
8	出身地域と別の場所で生活してみたいから	778	26%
9	親と家族の勧めで	121	4%
10	奨学金を借りているから	159	5%
11	都会の方が便利だから	1086	36%
12	その他(以下にご記入ください)	80	3%
	全体	2995	100%

Q43	将来的なことをお聞きします。もし、いつか地方へ移住するとしたら、青森県は移住先の選択肢として考えられますか。	N	%
1	はい	1588	53%
2	いいえ	1407	47%
	全体	2995	100%

Q44	青森県内企業のイメージについて、あてはまるものをすべてお選びください。	N	%
1	小規模・零細な企業が多く、大企業が少ない	2535	51%
2	地域に密着した仕事に携われる	2018	41%
3	アットホームで親しみやすい雰囲気がある	1297	26%
4	労働条件(賃金や福利厚生など)が悪い	1740	35%
5	将来性がなく、時代に合った仕事が少ない	870	18%
6	研究開発や企画部門が少ない	609	12%
7	下請けが多い	802	16%
8	技術力・専門性がある	0	0%
9	経営が不安定で計画性がない	347	7%
10	仕事にやりがいや誇りを持てる	352	7%
11	女性労働者が多い	128	3%
12	ワークライフバランスを実践できる	323	7%
13	特にイメージはない	927	19%
14	その他(以下にご記入ください)	25	1%
	全体	4935	100%

Q45	就職はどこを希望しますか。あてはまるものを1つお選びください。	N	%
1	民間企業を希望する	2079	42%
2	公務員を希望する	1606	33%
3	起業を希望する	111	2%
4	どれでもかまわない	1139	23%
	全体	4935	100%

Q46	あなたが働きたいと希望している業種を教えてください。あてはまるものをすべてお選びください。	N	%
1	公務	1426	29%
2	農林漁業	411	8%
3	建設業	267	5%
4	製造業	396	8%
5	電気・ガス・水道業	256	5%
6	情報通信業	531	11%
7	運輸・郵便業	93	2%
8	卸売・小売業	324	7%
9	金融・保険業	263	5%
10	不動産・物品賃貸業	127	3%
11	学術研究・専門・技術サービス業	630	13%
12	宿泊・飲食サービス業	436	9%
13	生活関連サービス・娯楽業	392	8%
14	教育・学習支援業	1018	21%
15	医療・福祉	1712	35%
16	複合サービス事業	186	4%
17	その他(以下にご記入ください)	123	2%
	全体	4935	100%

Q47	あなたはどのような仕事をしたいと希望していますか。あてはまるものをすべてお選びください。	N	%
1	管理的な仕事	1187	24%
2	専門的・技術的な仕事	3219	65%
3	事務的な仕事	1338	27%
4	販売の仕事	470	10%
5	サービスの仕事	1198	24%
6	保安の仕事	188	4%
7	生産工程の仕事	251	5%
8	輸送・機械運転の仕事	79	2%
9	建設・採掘の仕事	126	3%
10	運搬・清掃・包装等の仕事	106	2%
11	その他の仕事(以下に具体的にご記入ください)	154	3%
	全体	4935	100%

Q48	あなたが就職先を選ぶときに、重要だと思うものは何ですか。上位3つをお選びください	N	%
1	希望の勤務地で働ける	1609	33%
2	仕事内容が魅力的	1758	36%
3	労働環境がいい	3103	63%
4	休日・休暇が多い	2022	41%
5	福利厚生が整っている	2206	45%
6	将来性がある	735	15%
7	社会への貢献度が高い	450	9%
8	給料が高い	2276	46%
9	大企業や有名な会社	121	2%
10	親や先生の勧め	38	1%
11	公共交通機関をはじめ生活の利便性が高い	252	5%
12	在宅勤務やテレワークなど自由な働き方	178	4%
13	その他(以下に具体的にご記入ください)	10	0%
	全体	4935	100%

Q49	希望する初任給(月収)は、どの程度ですか。目安をお答えください。(記載例:〇〇.〇万円程度)	平均	10万円未満	10~20万円未満	20~25万円未満	25~30万円未満	30万円以上
			N	26.85	80	546	2390
	%		2%	11%	49%	23%	15%

Q50	あなたは就職活動に関する情報をどのように入手していますか。あてはまるものをすべてお選びください。	N	%
1	新聞・雑誌・企業のパンフレット	1928	39%
2	インターネットの求人情報	3605	73%
3	ハローワーク、ジョブカフェなど	575	12%
4	民間の職業紹介所	258	5%
5	合同会社説明会のようなイベントで	1108	22%
6	学校の就職支援センターなど	1895	38%
7	両親の紹介	615	12%
8	両親以外の家族、親戚の紹介	271	5%
9	親しい友人の紹介	435	9%
10	あまり親しくない知り合いの紹介	52	1%
11	その他(以下にご記入ください)	80	2%
	全体	4935	100%

Q51	あなたは就職活動の一環として、以下のようなプログラムを体験したことがありますか。また、今後、希望しますか。あてはまるものを1つお選びください。	全体	1 体験した	2 今後、体験することを希望している	3 それ以外
Q51S1	企業見学	4935 100%	1298 26%	2645 54%	992 20%
Q52S2	インターンシップ(就業体験)	4935 100%	958 19%	2945 60%	1032 21%
Q52S3	トライアル雇用(試行雇用)	4935 100%	91 2%	2027 41%	2817 57%

Q52	進学や就職などの進路を決める時、誰に相談します(した)か。あてはまるものをすべてお選びください。	N	%
1	父親	3074	62%
2	母親	4113	83%
3	兄弟・姉妹	1119	23%
4	親戚	471	10%
5	友人・知人	2142	43%
6	学校の先生	2754	56%
7	学校の先輩	708	14%
8	一人で決めた	360	7%
9	その他(以上にご記入ください)	50	1%
	全体	4935	100%

Q53	どこまでのライフステージを想定し、就職先を選んでいますか。	N	%
1	結婚	948	19%
2	子育て	798	16%
3	親などの介護	381	8%
4	転職	325	7%
5	定年退職	692	14%
6	想定していない	1791	36%
	全体	4935	100%

Q54	あなたは奨学金を利用していますか	N	%
1	はい	2899	59%
2	いいえ	2036	41%
	全体	4935	100%

Q55	利用している奨学金を教えてください。あてはまるものをすべてお選びください。	N	%
1	日本学生支援機構(貸与型)	2279	79%
2	日本学生支援機構(給付型)	1035	36%
3	青森県育英奨学会	39	1%
4	その他の民間企業などの奨学金	113	4%
5	その他の自治体などの奨学金	154	5%
	全体	2899	100%

Q56	奨学金の金額(月額)について教えてください。近い金額をお選びください。	N	%
1	20,000円	300	14%
2	30,000円	41	2%
3	40,000円	329	15%
4	45,000円	35	2%
5	50,000円	632	30%
6	55,000円	118	6%
7	60,000円	365	17%
8	上記以上(具体的に)	314	15%
	全体	2134	100%

Q57	青森県内のサポート企業に就職し、6年間青森県内に住み、働き続けたとき、奨学金の返還を支援する制度がありますが、あなたは知っていますか。	N	%
1	はい	1634	33%
2	いいえ	3301	67%
	全体	4935	100%

Q58	あなたは、自分が金銭的に困ったときに誰を頼りにしますか。次の中からあてはまるものをすべてお選びください。	N	%
		1 家族・親族	4683
2 友人・知人	734	15%	
3 近隣住民	23	0%	
4 市役所などの公的機関	724	15%	
5 金融機関	730	15%	
6 大学・学校等	266	5%	
7 頼る人がいない	125	3%	
8 その他(以下にご記入ください)	19	0%	
	全体	4935	100%

Q59	あなたは、自分が人間関係(いじめ、差別、ハラスメントなど)で困ったときに誰を頼りにしますか。次の中からあてはまるものをすべてお選びください。	N	%
		1 家族・親族	3606
2 友人・知人	3640	74%	
3 近隣住民	30	1%	
4 市役所などの公的機関	290	6%	
6 大学・学校等	862	17%	
7 頼る人がいない	263	5%	
8 その他(以下にご記入ください)	55	1%	
	全体	4935	100%

Q60	あなたは、自分が精神的(ストレス、憂うつなど)に困ったときに誰を頼りにしますか。次の中からあてはまるものをすべてお選びください。	N	%
		1 家族・親族	3517
2 友人・知人	3586	73%	
3 近隣住民	37	1%	
4 市役所などの公的機関	161	3%	
6 大学・学校等	478	10%	
7 頼る人がいない	353	7%	
8 その他(以下にご記入ください)	88	2%	
	全体	4935	100%

Q61	現在、あなたはどの程度「幸せ」だと感じていますか。「幸せ」を10点、「不幸」を「1」点とする何点になりますか。いずれかの数字から1つだけ選んでください。	平均	0～3	4～6	7～10	
		N	7.11	257	1378	3300
		%		5%	28%	67%

Q62	幸せを判断する際に、重視した点は何ですか。次の中からあてはまるものをすべてお選びください。	N	%
		1	健康状況
2	自由な時間	3103	63%
3	アルバイトなどの就業状況	913	19%
4	精神的なゆとり	3504	71%
5	社会貢献などの生きがい	553	11%
6	家族関係	2448	50%
7	友人関係	3332	68%
8	職場の人間関係	623	13%
9	地域とのつながり	228	5%
10	仕事の充実度	550	11%
11	家計の状況(所得・消費)	1154	23%
12	充実した余暇	1669	34%
13	その他(以下にご記入ください)	56	1%
	全体	4935	100%

執筆担当者

氏名	所属	担当章
李 永 俊	弘前大学	第1章
	人文社会科学部 教授	第2章
		第3章
		第4章
花 田 真 一	弘前大学	第5章
	人文社会科学部 准教授	集計表